

第19回 下田歌子賞受賞作品集

志

こころざし



今、伝えたいこと

主催

恵那市先人顕彰事業「下田歌子賞」実行委員会
岐阜県恵那市・恵那市教育委員会

学校法人実践女子学園

共催

株式会社PHP研究所

後援

岐阜県教育委員会・多治見市教育委員会
土岐市教育委員会・瑞浪市教育委員会

中津川市教育委員会

東京都日野市・日野市教育委員会・嚶鳴協議会

第19回 下田歌子賞受賞作品集



白
(扉の裏面)

はじめに

恵那市長
小坂 喬峰
こさか たかね

恵那市先人顕彰事業「下田歌子賞」は、本市岩村町出身の近代女子教育の先駆者であり、歌人としても名高い下田歌子先生の生誕百五十年を記念し、平成十五（二〇〇三）年度から開催しており今年度で十九回目を迎えました。

国内では新型コロナウイルス感染症が蔓延し、緊急事態宣言発令によりお仕事や学校など、皆様の生活に大きく影響を及ぼしました。このような状況の中、「志々今、伝えたいこと」をテーマに下田歌子賞の作品を募集したところ、エッセイの部では一三六五作品、短歌の部では三〇一五作品のご応募をいただき、誠にありがとうございました。全国各地の学校からも多数のご応募をいただきました。学校賞を受賞された二十二校をはじめ、ご応募いただきました学校関係者の皆様にも、心より感謝申し上げます。

お寄せいただいたエッセイは、実行委員会での厳正な事前審査を経た後、作家の童門冬二先生、東洋大学名誉教授の吉田公平先生、実践女子大学・実践女子大学短期大学部学長の難波雅紀先生、(株)PHP研究所シニアコンサルタントの寺田昭一先生、そして今回から審査員にご就任いただきました女優で元宝塚歌劇団の初風緑先生にご協力をいただき選考を行いました。私も審査員として作品を拝読しましたが、コロナ禍で楽しみや希望が奪われた悔しさ、それでも未来を夢見て前進する皆さんの力強さを感じました。作品の中には環境問題やSDGsによる身近な取り組み、東京オリンピック・パラリンピックの感動から得た大きな目標、故郷・家族への想い、先人からの学びなど、改めて「志」の奥深さに感銘を受けました。

また、短歌の部は、実行委員会による事前審査を通過した作品を対象に、市民及び当市への来訪者の皆様の投票審査により、入選作品を決定しました。受賞者の皆様には恵那市在住の書家、神谷慎軒先生に入選作品を短冊に記していただき、記念品として贈呈しました。

今年度の表彰式・記念イベントも恵那文化センター大ホールの施設を活用し、会場にお越しいただけない遠方の関係者の皆様にも会場の様子をライブ配信によりご覧いただけるようにしました。新型コロナウイルス感染症につきましては世界の状況からすると依然として予断を許さない状況が続きますが、この事態が一日も早く収束し、全国各地から恵那市へお越しいただき、皆様の明るい笑顔を拝見できる日を心待ちにしております。結びに、下田歌子先生はもとより、多くの先人に学び、顕彰し、高い志を学びの中に取り組むことにご賛同いただいているすべての皆様、本事業にご協力いただきました実行委員会の皆様、学校法人実践女子学園の皆様、(株)PHP研究所の皆様、ご後援いただきました日野市及び日野市教育委員会、嚶鳴協議会、岐阜県教育委員会、東濃地区各市教育委員会の皆様に心より御礼申し上げます。

第19回 下田歌子賞受賞作品集 【目次】

※小学生の部・中高生の部の住所は学校所在地です。

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 惠那市長 小坂 喬峰

【審査講評】
だれかさんをよろこばせよう……………審査委員長・作家 童門冬二 6

経験する中で「力」は培われる……………東洋大学名誉教授 吉田 公平 8

見つめる時間を大切に……………女優・元宝塚歌劇団 初風 緑 9

心の有り様に心を打たれて……………実践女子大学・実践女子大学短期大学部学長 難波 雅紀 10

「自分事」として読みたい作品の数々…… PHP 研究所シニアコンサルタント 寺田 昭一 11

募集要項……

12／受賞者一覽……

13／学校賞受賞校、審査委員、主催・共催・後援……

14

小学生の部

◇短歌の部

【入選】

●岐阜県恵那市 安藤 響起

●岐阜県恵那市 市岡 蒼土

●東京都日野市 関根 琉人

●岐阜県恵那市 中林 真絆 ●岐阜県恵那市 古田 もも
.....
16

◇エッセイの部

【最優秀賞】 背中を追いかけて…………… ●鹿児島県南さつま市 清水 怜咲 18

【優秀賞】 いじめや差別に対しての志…………… ●岐阜県恵那市 板垣 沙歩 18

大工になるために……………
●岐阜県恵那市
河合 捺月 19

地域の祭り和我……………
●岐阜県恵那市
小木曾詩 20

【佳作】強い気持ち・・・・・・・・・・・・・・・・・・●岐阜県恵那市 伊藤 瑠美 20

動物の未来……………●岐阜県恵那市 梅村千景 21

じゅう医になるために努力すること……………●岐阜県恵那市 佐伯 奏音 21

三年でがんばっていることがんばりたいこと……………●岐阜県恵那市 鈴木康介 22

将来のゆめをかなえるために……
●岐阜県恵那市 原田 俊司 23

中高生の部

◇短歌の部

【入選】

●東京都小平市 青木 凜 ●岐阜県恵那市 小木曾 結菜 ●岐阜県恵那市 中村 咲綯
●岐阜県恵那市 春名 真琴 ●東京都小平市 山西 維那

◇エッセイの部

【最優秀賞】

【優秀賞】

【佳作】

心のふるさと……………●岐阜県恵那市 瀬瀬 ほのか
明日の私のために……………●岐阜県恵那市 小栗 光
夢への道のり……………●岐阜県恵那市 深萱 雅楽
大切な二つのこと……………●東京都渋谷区 守永 幸叶
僕にできること……………●岐阜県恵那市 糟谷 眺
感謝と挑戦……………●岐阜県多治見市 木村 優希
舞台から伝えたいこと……………●東京都渋谷区 丸山 奈那子
人に感動を！……………●山形県米沢市 目崎 尋也
人にやさしい社会にするために……………●東京都渋谷区 渡部 真生

一般の部

◇短歌の部

【入選】

●岐阜県恵那市 宇野 貴子 ●福岡県志免町 奥田 昌元 ●大阪府堺市 田中 繭子
●岐阜県関市 古川 弘美 ●埼玉県さいたま市 宮澤 由季

◇エッセイの部

【最優秀賞】

【優秀賞】

【佳作】

帰郷……………●鹿児島県日置市 小平 竜平
つなぐという使命……………●東京都清瀬市 小松崎 潤
この腕を大きく広げて……………●京都府京都市 田島 美咲
親子でつなぐ志……………●愛知県豊橋市 仲川 浩
新しい古新聞……………●大阪府堺市 相野 正
夢の実現……………●大阪府寝屋川市 木俣 肇
私の志 お母さん……………●長野県塩尻市 堀内 三千代
寺小屋開設……………●長崎県佐々町 真辺 喜実子
遅咲きの志……………●福岡県福岡市 山本 築

【審査講評】

だれかさんをよろこばせよう

審査委員長・作家 童門 冬二 どうもん ふゆじ

「志とは何だろう？」 応募作品を読む前に改めて考えてみました。いろいろな考え方を頭の中にならべてみました。結論として自分なりに定めたのは、

「なりたい自分」のことではないか、ということでした。

しかし「なりたい自分」を生きる目標として定めても、

- ・すぐなれる
- ・すぐにはなれないが、これから努力すればなれる
- ・いくら努力してもとてもなれない

などの自己認識がつぎに問題となります。

応募作品はこの区分に応ずるものが多く、この現象はやはり現在の社会状況を反映している、と思いました。〃おこもり生活〃といわれる生活の変化です。小中高の児童・生徒にとっては学校教育の方法が激変し、大切な先生や学友たちとの接触ができなくなりました。それぞれの人格形成にとって大事な時期が失なわれるのです。このことはいまその立場にいる児童や生徒にとって、〃心の折れる経験〃として、忘れることはできないでしょう。

いきおい応募作品も、「いまいる場所で、すぐ自分にもできること」の紹介や発表が多くなりました。「しせいをよくすること」や「手を多くあげて、発表を多くすること」「発表のタイミングや表現にもくふうすること」など、身近な努力をテーマにする作品が目立ちました。

しかし作品は生きものです。どんなに身近でミクロなテーマ、素材であっても、書いている人がそのことに生命を燃焼させていれば（そのことだけに熱心になっていれば）、必ず読み手の胸にひびきます（胸キュンになります）。

ただ選者としてのわたしは、この基準にもうひとつ、わたしのほしい要素を加えました。それは、

・だれかさん（自分以外のひと）を、よろこばせようとする気持ちがあったかどうか

です。自分だけの達成をねがうのなら、その志は「私欲」です。でも、「だれかさんをよろこばせよう」とねがうなら、その志は「公欲」になります。

わたしが高得点としたのは、このことも評価の要素にしています。それはわたし自身の「志」にも深い関係があるからです。わたしの志は「だれかさんをよろこばせること」です。動機（きっかけ）があります。わたしにそういう考えをもたらしたのは、一つは黒澤明監督（戦後すぐ（一九五〇年）のヴェネツィア国際映画祭金獅子賞（最高賞）受賞者）の、生きるという映画の登場人物のひとりです。小田切ミキという実名での出演者です。ある市役所のお茶汲みアルバイトでした。でも職員たちの官僚主義（タライまわし・ひきのばし・言い訳ばかり（責任のがれ）など）にアイソをつかし、町工場に転職します。動物の人形をつくる工場です。ここで彼女は、自分の志を確立します。それは、「ウサギの人形をひとつつくるたびに、わたしは今日も、日本のどこかの赤ちゃんと仲よしになった」というものです。

これがわたしの生涯の志です。自分の評価も他者の評価も、もちろん「下田歌子賞」もこの要素が加わっています。今回は中学生の作品にそれを感じました。

童門冬二：作家。昭和二（一九二七）年、東京生まれ。東京都広報室長、企画調整局長、政策室長など要職を歴任後、退職し作家活動に専念。在職中に培った人間管理と組織の美学を歴史と重ね合わせ、小説、ノンフィクションの世界に新境地を拓く。『小説 上杉鷹山』『小説 佐藤一斎』『家庭こそ最良の学校です』下田歌子先生の生き方・考え方』（恵那市ふるさと学習読本）など、著書は六百冊以上。

【審査講評】

経験する中で「力」は培われる

東洋大学名誉教授 吉田 公平
よしだ こうへい

私たちが他者と意思疎通する方法には二つある。

一つ目は「話す、放す」と「聞く、聴く」。対話・講話・講演など、直截的な意思疎通である。話す力（内容の豊かさ）と話術・聴く力（理解できる素養と集中力）が対話を実りあるものにする。

二つ目は「書く」と「読む」。執筆と読書。間接的な意思疎通である。「書く力」（適切なテーマ設定と内容の豊かさ及び文章力）、「読む力」（テーマに対する感性の鋭敏さと内容を理解する読書力）が、訴える力、感受性を育むことになる。

いずれも生まれながらに備わっているわけではない。人生を過ごす中で培われるものである。生活環境や個人的な体験、身近な他者からの助言や刺戟などに恵まれて、深い関心を抱き、その刺戟をバネに経験する中で「力」は培われる。それはいつの間にか無意識の内に「力」がつくこともあるかも知れないが、本人がその気になって努力することが肝心である。特に「書く」場合には、その成果は歴然としている。

その意味では小学生の部の文章はいかにも幼い。生きた時間が短いのだからやむを得ない。しかしその中には思いが素直に表現されているものがあり、読んで楽しかった。中高生の部は人生を考え始める時期であり、テーマ設定も個性的で、力作が多かった。一般の部は我が人生を振り返って「志」を総括しており、「読ませる」ものが多かった。「書く力」を培うためには「読む訓練」が有益である。今後の成長を期待したい。

吉田公平…昭和十七（一九四二）年、宮城県石沼市生まれ。東洋大学名誉教授。中国哲学・日本近世思想史専攻。

「陽明学」を中心に西洋思想と比較、今日的な意義を探究する。現在は、ふるさと岩沼を拠点に、中国思想、日本思想の研究・啓蒙活動を展開。『陸象山と王陽明』『日本における陽明学』『中江藤樹心学派全集』『論語』など著書多数。

【審査講評】

見つめる時間を大切に

女優・元宝塚歌劇団
初風 緑 はつかぜ みどり

実践女子学園中学校・高等学校を卒業後、宝塚歌劇団では貴重な経験を重ね、今、この場に立たせて頂いておりますことを大変嬉しく思っております。

今年も新型コロナウイルスの影響により、思い通りにできたこと、できなかったことなど様々なご苦勞もあったことでしょう。それでも時は流れてゆく……内に秘めた思いをこうして誰かに伝えることは意味のあることだと感じます。

第十九回下田歌子賞。「志」をテーマにたくさんの方の応募を頂きました。また、作品を審査する中で、私自身評価する難しさを感じながらも、心を込めて採点させて頂きました。

小学生の志には、ご両親の影響が大きく、また、中学生は夢に向かって、高校生は現実を見つめ、一般の部は過去からの繋がりや今に立ち向かう志。どの作品にも皆様の「志」が胸に響きました。その中で最優秀賞・優秀賞・佳作として選ばれたわけですが、私は、結果はもちろんですが伝えたい想いを持って作品を書かれたことが何よりも素晴らしい志だと思いました。作文用紙に向き合った時間は、自分を見つめ他者を見つめ、環境・社会を見つめる愛おしい時間であることに皆様気が付かれたことでしょう。今後もこうした見つめる時間を大切にお過ごし頂ければと思います。皆様、素晴らしい作品をありがとうございました。

初風 緑・実践女子学園中学校・高等学校を卒業後、昭和六十三（一九八八）年、宝塚歌劇団に入団し男役スターとして活躍。確かな演技力と伸びやかなダンスで観客を魅了。平成十七（二〇〇五）年に退団した後、テレビや舞台で活躍。ストレッチ・バレエスタジオ「上野毛 G1 Studio」を主宰する他、実践女子大学の講師等も務める。令和二（二〇二〇）年より恵那観光大使。

【審査講評】

心の有り様に心を打たれて

実践女子大学・実践女子大学短期大学部学長
難波 雅紀
なんば まさのり

「志」をテーマに書かれた、いろいろなエッセイを読ませていただきました。

小学生の皆さんの文章には、「志」を立てる意気込みや熱意がとても生き生きと描かれています。人や職業に憧れる純粋な気持ち、物事に真剣に打ち込もうとする姿勢にとっても感銘を受けました。少し年齢が上がって、中学生や高校生の皆さんの作品からは、苦しみを乗り越えた向こうにある夢の実現を目指す、**健気**と**直向き**さがひしひしと伝わってきました。

そして、一般の方のエッセイには、苦境にあっても「志」を遂げようと奮闘している様子が心に鮮明に浮かんでくる作品もあれば、「志」を遂げたことからくる満足感や安堵感などが落ち着いた書きぶりから感じられる作品もありました。わけでも、そうした満足感や安堵感の底には、「志」を遂げるために振り切ってきたもののへの愛惜、そのために大切なものを置いてしまったことへの後悔が、**通奏低音**のように流れています。喜びや悲しみ、淋しさ、後悔など、いろいろ取り合わせたのが人生だからと思うと、満足や安堵とその対極にある愛惜や後悔が時に協和し、響き合っている心の有り様に、強く打たれました。

今回、読ませていただいた作品は、どれも個性的で、素晴らしいものばかりでした。このような機会を与えていただいたことに心から感謝したいと思います。

難波雅紀：昭和三十四（一九五九）年、神奈川県生まれ。昭和五十八（一九八三）年、学習院大学文学部英米文学科卒業後、六十三（一九八八）年、上智大学大学院文学研究科英米文学専攻博士前期課程を修了。平成元（一九九七）年に実践女子大学文学部英米文学科助教授として着任。十五（二〇〇三）年に同学科教授、以降、十七年、教務部長、二十三（二〇一〇）年、文学部長を歴任し、平成二十九（二〇一七）年四月に副学長及び学園常務理事に就任した。令和三（二〇二一）年より学長及び副理事長に就任。専門分野はアメリカ文学・文化。

【審査講評】

「自分事」として読みたい作品の数々

PHP研究所シニアコンサルタント
寺田 昭一^{てらだ しょういち}

平成二十九（二〇一七）年度の第十五回以来、下田歌子賞では「志」をテーマにエッセイと短歌を募集してきました。第一回目、第二回目の募集では、「志（夢、願い）」と、括弧付きのサブテーマがついていましたが、今回は「志」今、伝えたいこと」という明確なサブテーマをつけての募集でした。応募作品を読ませていただくと感じたことが二つあります。

一つは、今の自分の気持ちを読者に伝えるだけでなく、自分自身に改めて伝え再確認することで、「志」に向かって歩み続けたいという覚悟というか、力強さを感じさせてくれる作品が多かったことです。

もう一つは、「志」をテーマにして以降、身近なところ、自分の手が届くところに志の向かう先を発見し、歩んでいこうという作品が多く寄せられています。それが、ある意味、下田歌子賞の「志」の特徴となりつつありますが、今回、作品を読ませていただいて、作者のみならず「身近なところ」で経験され、感じられた課題や問題点にこそ、私たち一人ひとりが今、考えなければならぬことが集約されているのではないかと思います。作品のそのものは作者の個人的体験ですが、「他人事」として読むのではなく、「自分事」として読むことによって、自分自身の生き方や考え、世の中のある方に大きな学びと示唆を与えてくれる作品ばかりだと感じました。

その意味で、今回の応募作品はどれも優秀つげがたい素晴らしいものでしたが、選考にあたっては、情景が目につく文章。テーマは重くとも、明るく、さわやかな文章。リズム感のある文章であることなどにも配慮しました。

寺田昭一…昭和三十二（一九五七）年、大阪生まれ。大阪外国語大学（現…大阪大学）ロシア語課卒業後、PHP研究所に入社。文芸書、教養新書等の一般単行本編集の後、昭和六十二（一九八七）年、月刊誌「歴史街道」の創刊メンバー。その後、同誌編集長を経て現職。歴史を現代に生かすことをテーマに全国各地取材するとともに、自治体等の歴史・文化を活用した地域づくりをプロデュース。

■テーマ

志～今、伝えたいこと～

「綾錦^{あやにしき}着てかへらずば三国山^{みくにやま} またふたびは越えじとぞ思ふ」(故郷を旅立つ今、この胸に抱いている志を果たして立身出世するまでは、故郷に通じるこの三国山の峠を二度と越えない。必ず成功して戻ってくる。)——わが国近代女子教育の先駆者と言われる下田歌子先生は、固い決意と強い思いを歌に託して、16歳でふるさと岩村を離れ東京へと旅立ちました。

あなたは、これまで、どんな「志」をもって歩んできましたか？ これから、どんな「志」をもって生きていきますか？ 今の私、明日の私に伝えたいこと。明日の私のために、今、できること。やってみようと思うこと。そして、家族、知人友人、世の中の人に伝えたいこと…。

「志」をテーマに、あなたの想いを綴ったエッセイと短歌を募集します。(応募作品は、オリジナルで未発表のものに限ります。)

【エッセイの部】

募集テーマに沿って、具体的なエピソードを添えた作品をお寄せ下さい(1人1作品)

◎原稿枚数 ◇小学生の部 800字程度(400字詰原稿用紙2枚程度)

◇中高生の部 1,200字程度(400字詰原稿用紙3枚程度)

◇一般の部 2,000字程度(400字詰原稿用紙5枚程度)

◎応募期間 令和3年6月3日(木)～9月2日(木)(当日消印有効)

◎各賞

〈一般の部〉

◆最優秀賞 1編
正賞、副賞(賞金10万円)

◆優秀賞 3編
正賞、副賞(賞金3万円)

◆佳作 5編
正賞、副賞(賞金1万円)

〈中高生の部〉

◆最優秀賞 1編
正賞、副賞(図書カード1万円分)

◆優秀賞 3編
正賞、副賞(図書カード5千円分)

◆佳作 5編
正賞、副賞(図書カード3千円分)

◆嚶鳴協議会賞 3名

〈小学生の部〉

◆最優秀賞 1編
正賞、副賞(図書カード5千円分)

◆優秀賞 3編
正賞、副賞(図書カード3千円分)

◆佳作 3編
正賞、副賞(図書カード2千円分)

◆嚶鳴協議会賞 3名

【短歌の部】

◎各賞 《一般の部》《中高生の部》《小学生の部》部門ごとに入選5首
正賞・副賞(一般：賞金1万円、記念品 中高生：図書カード5千円分、記念品 小学生：図書カード3千円分、記念品)

◎応募方法 応募は一人1首に限ります。応募方法は「エッセイ募集」に準じます

◎応募期間 令和3年6月3日(木)～9月2日(木)(当日消印有効)

【学校賞】

エッセイの部、短歌の部いずれか、または両方に学校で取り組み応募作品が顕著に多い学校に、学校賞を贈呈

■発表・表彰式

令和4年1月22日(土) 岐阜県恵那市で発表・表彰式

*「中高生の部」「小学生の部」入選者と保護者1名は旅費主催者負担でご招待

*オンライン配信

第19回 下田歌子賞 受賞者一覧

エッセイの部 テーマ「志～今、伝えたいこと～」

■小学生の部

(氏名五十音順 応募総数：109作品)

賞	タイトル	名前	学校名
最優秀賞	背中を追いかけて	清水 怜咲	鹿児島県南さつま市立坊津学園 6年
優秀賞	いじめや差別に対しての志	板垣 沙歩	岐阜県恵那市立山岡小学校 6年
	大工になるために	河合 捺月	岐阜県恵那市立岩邑小学校 6年
	地域のお祭りと私	小木曾 詩	岐阜県恵那市立山岡小学校 6年
佳作	強い気持ち	伊藤 瑠美	岐阜県恵那市立山岡小学校 6年
	動物の未来	梅村 千景	岐阜県恵那市立山岡小学校 6年
	じゅう医になるために努力すること	佐伯 奏音	岐阜県恵那市立岩邑小学校 5年
	三年でがんばっていることがんばりたいこと	鈴木 康介	岐阜県恵那市立武並小学校 3年
	将来のゆめをかなえるために	原田 俊司	岐阜県恵那市立山岡小学校 6年

■中学生の部

(氏名五十音順 応募総数：1,032作品)

賞	タイトル	名前	学校名
最優秀賞	心のふるさと	瀧瀬 ほか	岐阜県立恵那高等学校 3年
優秀賞	明日の私のために	小栗 光	岐阜県恵那市立岩邑中学校 3年
	夢への道のり	深置 雅楽	岐阜県恵那市立岩邑中学校 1年
	大切な二つのこと	守永 幸叶	東京都・実践女子学園中学校 1年
佳作	僕にできること	糟谷 眺	岐阜県恵那市立山岡中学校 3年
	感謝と挑戦	木村 優希	岐阜県・多治見西高等学校 2年
	舞台から伝えたいこと	丸山 奈那子	東京都・実践女子学園中学校 1年
	人に感動を！	目崎 尋也	山形県米沢市立第一中学校 1年
	人にやさしい社会にするために	渡部 真生	東京都・実践女子学園中学校 3年

■一般の部

(氏名五十音順 応募総数：224作品)

賞	タイトル	名前	住所
最優秀賞	帰郷	小平 竜平	鹿児島県日置市
優秀賞	つなぐという使命	小松崎 潤	東京都清瀬市
	この腕を大きく広げて	田島 美咲	京都府京都市
	親子でつなぐ志	仲川 浩	愛知県豊橋市
佳作	新しい古新聞	相野 正	大阪府堺市
	夢の実現	木俣 肇	大阪府寝屋川市
	私の志 お母さん	堀内 三千代	長野県塩尻市
	寺小屋開設	真辺 喜実子	長崎県佐々町
	遅咲きの志	山本 築	福岡県福岡市

短歌の部 テーマ「志～今、伝えたいこと～」

■小学生の部

(氏名五十音順 応募総数：1,273作品)

賞	短歌作品	名前	学校名
入選	ぼくはみる にじゅうねんご いまよりも ごみをへらした おおいちきゅう	安藤 響起	岐阜県恵那市立岩邑小学校 3年
入選	岩村の 自然守るよ いつまでも 田園風景 ぼくのふるさと	市岡 蒼士	岐阜県恵那市立岩邑小学校 4年
入選	について セミのぬけがら この木にも 出かけたのかな 世界みたくて	関根 琉人	東京都日野市立南平小学校 5年
入選	ありがとう かぞくにもらった あいじょうを たくさんかえし それをうけつづ	中林 真絆	岐阜県恵那市立大井第二小学校 5年
入選	懂れの 母を見てきた 十年間 早くになりたい 立派な保育士	古田 もも	岐阜県恵那市立三郷小学校 6年

■中学生の部

(氏名五十音順 応募総数：1,449作品)

賞	短歌作品	名前	学校名
入選	したいこと 思う存分 やりつくす 時は短し 急げよ己	青木 凜	東京都・白梅学園高等学校 2年
入選	「ありがとう」 たった五文字に すくわれる あなたの役に 私は立ちたい	小木曾 結菜	岐阜県恵那市立上矢作中学校 3年
入選	大丈夫 素顔で笑う あの夏に きっと戻れる あともうすこし	中村 咲絢	岐阜県恵那市立恵那西中学校 2年
入選	ありがとう 伝えておこう 心から 感謝の気持ち 今日とは今日だけ	春名 真琴	岐阜県恵那市立恵那東中学校 2年
入選	幾たびも 踏まれてもなお 空を見る 心に咲かせる 加密列 (かみつれ) の花	山西 維那	東京都・白梅学園高等学校 2年

■一般の部

(氏名五十音順 応募総数：293作品)

賞	短歌作品	名前	住所
入選	創りたい 自立と調和の 人の森 恵那の自然の 声を聴きつつ	宇野 貴子	岐阜県恵那市
入選	生きるって 自分を信じ 登る山 曲りくねった 道もまた道	奥田 昌元	福岡県志免町
入選	先見えぬ 今こそ強く 志 遠い未来に 光を放つ	田中 藤子	大阪府堺市
入選	補欠でも いつも笑顔で 行く君の 背中に大志 強く感じる	古川 弘美	岐阜県関市
入選	「ねえ、母さん」 丸い背中に 夢語る 黄昏キッチン ゆうげの香り	宮澤 由季	埼玉県さいたま市

第19回 下田歌子賞 学校賞受賞校

学校賞は、「エッセイの部」「短歌の部」いずれか、もしくは両方に、学校で取り組んでいただき、応募数が顕著に多かった学校に授与させていただく賞です。

	学校名	所在地	受賞対象部門
小学校	恵那市立岩邑小学校	岐阜県恵那市	エッセイ・短歌
	恵那市立武並小学校	岐阜県恵那市	エッセイ
	恵那市立山岡小学校	岐阜県恵那市	エッセイ
	恵那市立飯地小学校	岐阜県恵那市	短歌
	恵那市立恵那北小学校	岐阜県恵那市	短歌
	恵那市立大井第二小学校	岐阜県恵那市	短歌
	日野市立南平小学校	東京都日野市	短歌
中学校	恵那市立岩邑中学校	岐阜県恵那市	エッセイ
	恵那市立山岡中学校	岐阜県恵那市	エッセイ
	実践女子学園中学校	東京都渋谷区	エッセイ
	多久市立東原庫舎東部校	佐賀県多久市	エッセイ
	揖斐川町立谷汲中学校	岐阜県揖斐川町	短歌
	恵那市立明智中学校	岐阜県恵那市	短歌
	恵那市立恵那西中学校	岐阜県恵那市	短歌
	恵那市立上矢作中学校	岐阜県恵那市	短歌
	恵那市立串原中学校	岐阜県恵那市	短歌
	美濃加茂市立西中学校	岐阜県美濃加茂市	短歌
高等学校	多治見西高等学校	岐阜県多治見市	エッセイ
	岐阜県立恵那南高等学校	岐阜県恵那市	短歌
	岐阜県立大垣桜高等学校	岐阜県大垣市	短歌
	白梅学園高等学校	東京都小平市	短歌
	新潟青陵高等学校	新潟県新潟市	短歌

第19回 下田歌子賞 審査委員

童門 冬二 ◎作家（審査委員長）
 吉田 公平 ◎東洋大学名誉教授
 初風 緑 ◎女優、元宝塚歌劇団
 難波 雅紀 ◎実践女子大学・実践女子大学短期大学部学長
 寺田 昭一 ◎月刊誌「歴史街道」特別編集委員、PHP 研究所シニアコンサルタント
 小坂 喬峰 ◎岐阜県恵那市長

第19回 下田歌子賞 主催・共催・後援

【主催】 恵那市先人顕彰事業「下田歌子賞」実行委員会
 岐阜県恵那市・恵那市教育委員会
 学校法人実践女子学園

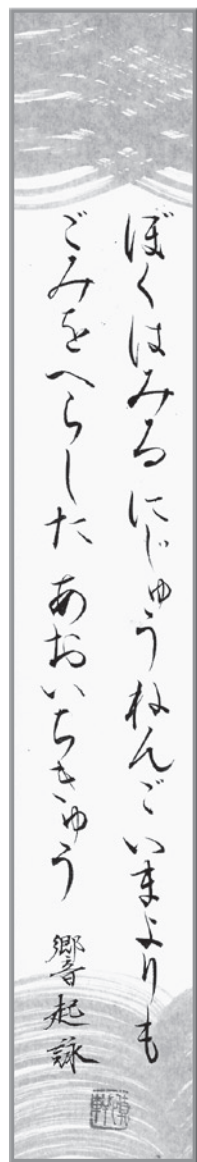
【共催】 株式会社 PHP 研究所

【後援】 岐阜県教育委員会
 多治見市教育委員会・土岐市教育委員会・瑞浪市教育委員会・中津川市教育委員会
 東京都日野市・日野市教育委員会
 嚶鳴協議会（大野町〈岐阜県〉、沖縄市〈沖縄県〉、小田原市〈神奈川県〉、釜石市〈岩手県〉、
 木曽町〈長野県〉、高鍋町〈宮崎県〉、多久市〈佐賀県〉、竹田市〈大分県〉、田原市〈愛知県〉、
 東海市〈愛知県〉、長野市〈長野県〉、日田市〈大分県〉、養父市〈兵庫県〉、米沢市〈山形県〉、
 恵那市〈岐阜県〉）

第
19
回
下
田
歌
子
賞
受
賞
作
品

小学生の部

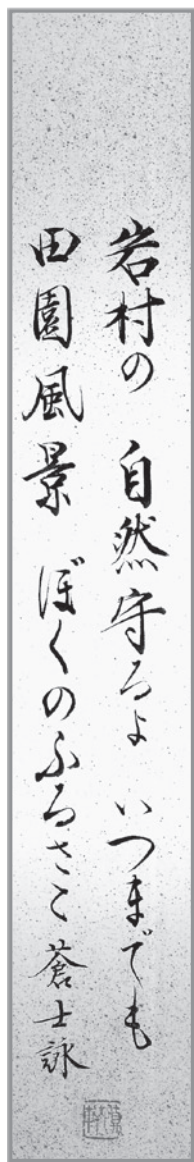
恵那市民が選ぶ「志」の歌



ぼくはみる にじゅうねんご いまよりも
ぐみをへらした あおいちきゅう

岐阜県恵那市立岩田小学校三年

安藤 響起
あんど うびき



岩村の 自然守るよ いつまでも
田園風景 ぼくのふるさと

岐阜県恵那市立岩田小学校四年

市岡 蒼士
いちおか ひろと

ついでに セミのぬけがら この木にも
出かけたのかな 世界みたくて 琉人詠



ついでに セミのぬけがら この木にも

出かけたのかな 世界みたくて

東京都日野市立南平小学校五年

関根 琉人

ありがとう かぞくにもらった あいじょうを
たくさんかもし それをうけつぐ 真絆詠



ありがとう かぞくにもらった あいじょうを

たくさんかえし それをうけつぐ

岐阜県恵那市立大井第二小学校五年

中林 真絆

憧れの 母を見てきた 十年間
早くなりたけ 立派な保育士もも詠



憧れの 母を見てきた 十年間

早くなりたけ 立派な保育士

岐阜県恵那市立三郷小学校六年

古田 もも

背中を追いかけて

鹿児島県南さつま市立坊津学園六年

清水 怜咲

「怜咲の方が速いって。」

と声を掛けてくれた先輩がいる。その人は、明るくて陸上クラブのみんなをまとめてくれる存在だ。私が憧れる全国大会にも五年生の時にすでに出場していて、結果でも引つ張ってくれていた。

春が来て、私は六年生になった。先輩は高校生だ。一緒にきつい練習をこなしてきたのに、先輩はもう、グラウンドには来ない。先輩がいなくなって改めて、先輩のすごさを感じた。先輩の背中はずぐそこにあったはずなのに、いなくなって初めてその距離に気付いた。

挫折そうなとき、「怜咲も頑張つて。」という言葉を感じ出した。きつい練習も私の前を走ってくれた先輩を思い出しながら、必死に練習した。「私も先輩と同じ舞台に立ちたい。」そう決意したからだ。毎日練習に行き、みんなの前を走った。苦しくても手を抜かなかった。ただ好きで始めた陸上だったが、「速く走りたい。」「全国大会に出場したい。」先輩の存在が私に目標をくれた。段々と結果にも表れて、それがとても嬉しかった。

六年生の夏、私の全国大会出場が決まった。先輩とは一年差だった。県の大会で一位を取ったときはとても嬉しかった。タイムはま

だまだ先輩に及ばないけれど、すこしだけ近づいた気がする。

先輩と練習した日々やその姿をみて、努力は必ず報われるということを知った。だから、日の丸を背負った選手になりたいという夢も、叶えられると信じている。

今日もまた、速くなるために私は、走る。先輩の背中を追いかけて。

いじめや差別に對しての志

岐阜県恵那市立山岡小学校六年

板垣 沙歩

私はこの世からいじめや差別がなくなつてほしいなと思います。いじめや差別によつて苦しんでいる人がたくさんいると思います。私が今この作文を書いているときも、だれかがいじめで苦しんでいると思うとすごく悲しいです。私も実際に悪口を言われている所を見たことがあります。でもその時は、自分も同じことをされたらと思うと不安で注意することができませんでした。私はそのことを今もずっと後悔しています。あのときあの子を助けてあげたら何か少しでも変わっていたのかなと思います。あの子がきずつくことも無かったし、私も後悔することも無かったかなと思います。私はそうやっていじめや悪口、差別で苦しむ子を助けたいし、いじめる人はどんなことを思っているかわからないけど私は絶対にいじめはしたくないです。でももししたら私が分からなかっただけで知

らないうちにだれかをきずつけているかとも思うと怖いです。でも絶対に悪口やいじめはしないと思います。私がいじめ、差別に対する志は勇気をもっていじめられている人を助けるということです。自分もいじめられるかもしれないけどだからといってまた助けられずに後悔するのはもういやなのでこれからの生活でだれかがつらい思いをしていたら助けたりしたいです。でも私は正直いじめや差別をすべて無くそうというのは無理なのかなと思います。この作文には私の考えが書いてあるだけでみんながみんな同じ考えではないと思うので世界中の人で協力していじめを無くそうというの無理だと思います。けどだからといってあきらめず身の回りのことに目を向けて、少しずつ順番に「いじめ」や「差別」の問題を解決していけたらなと思います。だれかのために行動することを頭に置いてこれからも生活していきます。

大工になるために

岐阜県恵那市立岩田小学校六年 河合 捺月^{かわい なつ}

ぼくの夢は、大工になることです。そう思ったきっかけは、ぼくの家を建ててくれた大工さんの姿を見て、かっこいいと思ったからです。

ぼくは、算数と国語が苦手です。とくに、算数が苦手です。計算

の仕方が覚えられなかったり、理解して解いたりすることができません。国語も苦手なので、文章を読んで理解することがとても苦手です。そのため、算数の文章も理解することが難しいです。

宿題をやる時には、分からないと、いつも家族に教えてもらっています。それでも、難しい時は、あきらめてしまふこともあります。こんなふうに、ぼくは、嫌なことやできないことがあると、すぐに逃げてしまいます。好きなことでないと、集中して続けることができません。これが、ぼくの弱いところです。ぼくは、小さい頃から大工さんにあこがれていて、大工さんになりたいと思っています。大工さんは、難しい説明書をすらすらと読んで理解して、建物を作っていきます。計算も間違えてはいけません。また、夏の猛暑の中でも働いています。今のぼくなら、すぐに弱音をはいてしましますが、手を止めずにもくもくと作業しています。そんな姿がとてもかっこいいです。

大工さんは、辛い仕事でも、とても楽しそうに働いていました。ぼくも、もっと、ものづくりの楽しさを知りたいと思いました。

そのためには、まずは、苦手な算数や国語から逃げずに頑張ること、何事にも根気強く取り組むことに挑戦しようと思います。そうすることで、ものづくりの本当の楽しさを知ることができ、あこがれの大工さんに近づくことができると思います。

そして、将来、必ず大工さんに、ぼくはなります。

地域のお祭りと私

岐阜県恵那市立山岡小学校六年

小^こ木^ぎ曾^そ詩^{うた}

私は、地域のお祭りの巫女をやっています。毎年あるお祭りなので「とても大切なお祭り」ということが分かりもつと真剣に取り組むようになりました。

今、コロナでできるかできないか分からないけど、いっしょけんめいやりたいし、前に、授業で地域などのことを勉強して、より地域のお祭りなどを大切にしたいと思っています。

私は「このお祭りはきつとこれからも受けつがれるだろうな…でもどうしたら、これからにつながっていくだろう」と考えたときに、まずは今、自分がやり切る、ということを目指してがんばっています。

地域のお祭りは、とても身近にあって、自分も体験しています。だからこそ「次は自分が」という思いでこれからは取り組んでいき、大事にして、ずっと受けつがれていくような、お祭りを自分たちがしていきたいです。

私は小さな時から、このお祭りに参加してたくさんの思い出があります。

だからこそつながっていききたいし、自分もしっかりとやりたいです。私には七つ下の妹がいます。その妹もきつと巫女をやると思いま

す。姉が巫女をやる姿を見て「すごいなあ…」と思ってもらえるように私も、これからいっしょけんめいやりたいです。

私から見た地域のお祭りはとても大事なことです。その大事なことでだからこそ自分から進んで取り組んでいきたいです。

佳作

強い気持ち

岐阜県恵那市立山岡小学校六年

伊^い藤^{とう}瑠^る美^み

「強い気持ち」。私は、強い気持ちとは何だろうと書くまで考えたことはありませんでした。考えて見ると、「あきらめないこと」「最後までやりきること」。何ども挑戦しようと思いついてみても、上手いかなないと、どうしようと迷ってしまうので私は、三つの宣言を決めることにしました。

一つ目は、「めんどくさい」や「やりたくない」と自分で決め付けてしまうことがあります。だから決め付けない気持ちが一つ目の宣言です。

二つ目は、いやという気持ちを無くすことです。そのために自分なら「できる」と思ったり「やらなきゃ分からない」という気持ちを強くしたら人まかせにしません。なので、自分を信じる気持ちが大切な二つ目の宣言です。

三つ目は、自分の気持ちをしっかりと相手に伝えることだと私は

思います。わけは、自分は、みんなのためにどんな思いでやるのかを言えば、後悔しなかったので、自分の気持ちをしっかりと言うことが、三つ目の宣言だと思いました。

私はこの三つの宣言を意識しながら応援団に立候補しました。少し緊張したけど、勇気をだすこと、自分を信じること、相手に自分の気持ちを伝えることができました。

そして、私は、副団長になることができました。これからはこの三つの宣言を大切にして、強い気持ちを作っていきたいと思いました。

佳作

動物の未来

岐阜県恵那市立山岡小学校六年
梅村 千景^{あめりち ちかげ}

私は、このようなテレビをよく見ます。「山から降りてきた動物が畑をあらす。」「人工林の芽をシカが食べる。」などのニュースが今たくさんあります。でも動物たちは、森がどんどんこわされて、食べ物がないので畑の野菜などを食べてしまうだけで、動物たちは悪くないのに殺処分されてしまうこともあります。もちろん、畑に「食べちゃだめ。」と書いても動物たちは分からないし、「ここは人間の物食べちゃだめ。」と動物は思わないと思います。

他にも、ペットにされている犬やねこは、すてられたり、飼いま

に虐待されるペットがいます。そして、野良になったペットは保護されて、年をとっていたり、人になつかなかったペットは殺処分されてしまいます。

このようなことが続かないように、私は自分でできることをしたいと思いました。たとえば、自然を大切にすることです。その中でもゴミをポイすてしないことや、ペットボトルなどのプラスチックなどの物は、あまり使わないことや、電気を使う時に気をつけられればいいと思います。他にも、天然林は切らずに人工林を少しずつ切って大切に使いたいと思います。ペットの問題では、飼っている動物を最後まで責任を持って育てることや、ペットを飼う時はペットシヨップなどではなく、保護施設から犬やねこを、もらい受けるといいと思います。そして、このようなことを一人一人が意識して実行しないとなくならないので、自分には関係ないと思わずにやることが大事だと思います。

佳作

じゅう医になるために努力すること

岐阜県恵那市立岩邑小学校五年
佐伯 奏音^{さへき かな}

じゅう医になりたい。

わたしは、二年生のときにお母さんが黒い子ねこの写真を見せてくれました。

そして、次の日——車に乗っていたら泣き声が聞こえたので見てみたらそこに黒い子ねこがいました。それから動物が大好きになってじゅう医になりたいと思いました。

そして、じゅう医の勉強が出来る大学に入れるように、五年生の今から努力を続け、六年生では今の課題を克服できるようにしたいと思っています。今のわたしの課題は二つあります。

一つ目は、勉強がまだまだ出ていないことです。今わたしは、自学をがんばっています。今年の目標は五冊です。必ず達成したいと思います。

二つ目は、優しく声をかけることです。今のわたしは、クラスの人達にも声をかけることが出来ません。でも、じゅう医さんは、優しく声をかけてくれます。じゅう医さんが優しく声をかける理由は、来てくれた人を安心させるためだと思います。わたしもそんなじゅう医さんになりたいです。

「私欲は有る可からず。

公欲は無かる可からず。

公欲無ければ、則ち人を恕する能わず。

意味はみんなのために自分を活かす。」

これは岩村の一斎先生が書いた物です。

いつかじゅう医になることが出来たら、私のふるさと岩村に帰ってきて、多くの動物たちの命を救っていききたいと思っています。

三年でがんばっていることがんばりたいこと

岐阜県恵那市立武並小学校三年 すずき こうすけ 鈴木 康介

ばくが、三年生でがんばっていることは、三つあります。

一つ目は、よびかけをすることです。

理由は、チャイムがなる前からすわっていればきもちよくはじめられるからです。だから、すわってないこによびかけるとクラスみんながきもちよくじゅぎようがはじめられると思っています。からよびかけをしています。

これからはただよびかけをするだけではなくよびかけのし方よびかけのタイミング考えてよびかけをしたいと思います。これからももっとよびかけをふやしたいです。

二つ目は、かかりの仕事です。

ばくのかかりは学きゅう長です。なので三年生のみんながぜんいんで三年生の学きゅうをよくするにはどんなことをしたらいいのと考えています。ほかのはんのはん長さんもあります。これからは、ほかのはん長さんとも一しょによい学きゅうになるために考えていきたいと思っています。

三つ目はじゅぎようでの手をあげてはつげんです。

ばくは、手をあげてはつげんが少ないと思っています。すこしは、できているけれどももっともつと手を上げてはつげんをしたいと思っ

ています。

ぼくは、この三つのことをもつとがんばって、三年生のこり半分すこしいです。三年生でやることをぜんぶしてかんぺきな三年生で四年生になりたいです。三年生できめたえがおでチャレンジさせあいができるクラスにしたいです。

佳作

将来のゆめをかなえるために

岐阜県恵那市立山岡小学校六年 原田 俊司はらだ しゅんじ

ぼくは、正直強い志はありません。

だけどこの作文を書くにあたって父になぜ今の職業についたか聞きました。

父は好きだったことを職業にしましたと言いました。単純に好きなことを仕事にできることはすごいことだと思いました。

ぼくはまだ好きで仕事にしたいことには出会っていません。

出会うために色々なことに目を向けて、多くの体験をしながら将来の夢を探していきたいと考えています。ただぼくは進んで何かをやるタイプではないので、まずは今ちよつときようみのあるバスケットボールやよくお母さんやお父さんにマッサージをしてあげるとうろこんでくれるのでそのマッサージの仕事をしている人に話を聞いて見たりバスケットボールだったらやってる人に話を聞いた

りしたいと思いました。

そのほかにもきようみのないことでも楽しいことや好きなことやきようみがわくものもあると思うのでいろいろなことにちようせんしていきたいと思いました。

好きなことを仕事にしている人はとてもすくないです。それは、もし夢が見つかったても夢をかなえるためには、つらいことやかべもあるからです。だからぼくは、そのつらいことやかべなどをくろうしながらこくふくしたりしながらぼくは好きなことや仕事をやっていきたいと思いました。

下田歌子先生のこと

童門 冬二



下田歌子先生は安政元（一八五四）年八

月九日に、現岐阜県恵那市岩村町に生まれました。生家は藩（松平家）の儒者でした。父は平尾録蔵、母は房、そして歌子先生は鉦といいました。明治三（一八七〇）年に父録蔵が、明治新政府の神祇官宣教師に任ぜられて上京し、翌春、後を追って鉦が上京。引き続き一家をあげて東京に出ました。宮内省の御用掛・八田知紀に和歌の教えを受けていた歌子先生は、明治五（一八七二）年十月、推挙されて宮中に出仕し、女官として皇后陛下（後の昭憲皇太后）に仕えます。下田先生の和歌の才能を愛められた皇后陛下が、「これからは

歌子となるように」と仰せられ、鉦の名を改めました。才女の名が高く、明治の紫式部などと呼ぶ人もいました。その後下田猛雄と結婚し、明治十二（一八七九）年十一月には宮中を辞しましたが、周囲から望まれて自宅に「桃天学校」を開設し、政府高官や華族の子女の教育に当たりました。

夫の死後、再び宮内省に入り、華族女学校（学習院）が開校されると教授になりました。この間に、欧米の女子教育を視察するためにヨーロッパに渡っています。

明治三十一（一八九八）年に「帝國婦人協会」を結成、その付属として、翌年「実践女学校」（実践女子大学の淵源）を開設しました。そして清国（このころの中国の国名）からの女子留学生を、積極的につけいれました。

桃天学校時代には、明治五（一八七二）年に日本からアメリカに留学した五人の女子留学生のうち最年少（当時八歳）の津田

梅子が明治十五（一八八二）年に帰国してきたので、英語の教授陣に加えています。歌子先生は、梅子に英語の指導を頼むかわりに、梅子に国語と習字を教えました。少女時代をアメリカですごした梅子は、英語は得意でしたが日本語が十分ではなかったのです。穴をワナ、柳をウナギといったそうです。とくに手紙の中で使う「候」という字の意味と用字法がわからなくて、何度も歌子先生にしつこく質問したそうです。歌子先生の説明を英語でノートをとったといわれています。

歌子先生のめざしたことは、日本における女性の地位向上です。そのための女性の教養の高まりです。しかもそのことを「日本女性のよさを失わずに実行する」という、しとやかさとやさしさ、温かさを大切にすること、というものでした。その志はいまも香を失わずに、実践女子学園やふるさと恵那市だけでなく、さまざまなところで引きつがれています。

第
19
回
下
田
歌
子
賞
受
賞
作
品

中高生の部

恵那市民が選ぶ「志」の歌

したいこと 思う存分 やりつくす
時は短し 急げよ己 凛詠



したいこと 思う存分 やりつくす
時は短し 急げよ己

東京都・白梅学園高等学校二年 青木 凛あおき りん

ありがとう たった五文字にすくわれる
あなたの役に 私は立ちたい 結菜詠



「ありがとう」 たった五文字に すくわれる
あなたの役に 私は立ちたい

岐阜県恵那市立上矢作中学校三年 小木曾 結菜こぎそ ゆいな

大丈夫 素顔で笑う あの夏に
きつと戻れる あともうすこし 咲絢詠



大丈夫 素顔で笑う あの夏に

きつと戻れる あともうすこし

岐阜県恵那市立恵那西中学校二年

中村 咲絢

ありがとう 伝えておこう 心から
感謝の気持ち 今日だけ 真琴詠



ありがとう 伝えておこう 心から

感謝の気持ち 今日だけ

岐阜県恵那市立恵那東中学校二年

春名 真琴

幾たびも 踏まれてもなお 空を見る
心に咲かやう 加密列の花 維那詠



幾たびも 踏まれてもなお 空を見る

心に咲かせる 加密列の花

東京都・白梅学園高等学校二年

山西 維那

心のふるさと

岐阜県立恵那高等学校三年 瀬瀬 ほか

ふるさとの平和は俺たちが守る！

その昔：亀を助けた少年が、ふるさとの平和を守るといふ、おかしな伝説。そして始まる、その少年たちと、大人になってしまった私達の物語。

二〇一一年、ここ岐阜県恵那市にて。恵那市民五万六千人が協力して、映画『ふるさとがえり』を作り上げた。

あれから約十年——。私も参加したこと、地元飯地町が撮影に使われたこと、知っている人が何人も出演していたことなんて、忘れていた。高校卒業を直前に控え、ふとあの映画を思い出した。あの頃は幼く、内容などほとんど覚えていない。この年になって再び見てみると、「ふるさと」について考えさせられないはずがなかった。

まちの平和を守る。それに不可欠なのは、消防団。映画でも、火事ときにはいち早くかけつけ、行方不明者が出れば朝から晩まで何日も探し続け、普段からお年寄りの家を訪問したり、訓練をしたり……。まちの平和のために戦う消防団はかっこよかった。さらに、主人公たち消防団が身にまとう制服は、いつも家に掛かっている父のものと一緒。集っているのは、父の通う飯地分団の詰所。このことに、なぜか胸が熱くなった。

仕事に加えて、こんなにも大変な活動、半端にやれるものではないはず。消防団の偉大さだけでなく、「ふるさとを想う」ってこういうことなのだと思います。「地域に貢献したい」「ふるさとを活性化させたい」。そう言葉にするのは容易いが、ふるさとを想うとは、自ら動くことなのだと。二度の合併を経て『心の合併プロジェクト』として、『ふるさとがえり』制作をこの地で実行した恵那市。日々、まちのつながり、平和を守る消防団。これだけではない。周りを少し見渡しただけで、「ふるさと」のために動く人はたくさんいた。

「ふるさと」は誰にでもある。映画を見て私は、ここ恵那という地は、どこの誰であろうと「ふるさと」を感じられる気がした。つまり、「心のふるさと」。豊かな自然、田園風景。歴史を感じられる街並みや伝統芸能。なにより「つながり」がある。人と関わる機会が減り、今まさに「つながり」を誰もが求める時代。地域社会のつながりこそ、私たちにいま必要なものかもしれない。恵那ならば、きつと誰しもの「心のふるさと」になり得るだろう。

『心のふるさと恵那』への誓い

私はいま、ここで『心のふるさと恵那』に宣言する。いつか私自身、胸を張って「ふるさと恵那」を語る人になる。必ず、夢を叶えるべく「ふるさとがえり」をする。恵那に私なりの形で貢献する。まずは、恵那への愛と知識を深めることから始めよう。

恵那がいつまでも「つながり」のある、「心のふるさと」であり続けられるように。

ふるさと恵那の平和を私も守る！

明日の私のために

岐阜県恵那市立岩田中学校三年 小栗^{おぐり}光^{あき}

私は自分の「志」を持つことに臆病になっている。それは「志」を持ったとしてもそれを実現する自信が私には無いからだ。小さい頃は様々なことに興味を抱き、将来に大きな夢を見ていた。だが、受験生となり、正面から自分の将来と向き合ってみると私のやれそうなことが分からなくてどうしよう、どうしよう、と悩むばかり。将来の夢も持てなくなっていた。

今回、このエッセイを書くことになり、私の「志」ってなんだろう？と考えた。私には将来の夢なんかない。今、特別頑張っているものもない。私が今目指しているものが明確にあるわけでもない。これではエッセイが書けない、と困った私は近くの友人に「エッセイ、どんなことを書けばいいか分からない。将来の夢とか思いつかないし。」と相談してみた。そうしたらその友人は「将来の夢とかじゃなくても、今頑張りたいって思うもので良いんじゃないかな。」と私に言った。ハッとした。私は遠い先のことばかり考えていて今からでも頑張れるようなことを探すのを忘れていた。そうだ、今からでも全然遅くないのだ。今の私にできることは何だ？ すぐに私の中で答えを出すことができた。勉強だ。受験生の今、私が全力で取り組むべきこと、頑張れることである。とってもシンプルではあ

るが、毎日机に向かい勉強するというのは習慣として身に付いていない私にとっては難しいことなのだ。いつも勉強することを後まわしにしまい、テストの前日になって慌ててやる、というのが毎回のようになっている。だがそれももう終わりだ。明日の私のために今、移動に移す、ということを心掛けていきたいと思う。私には将来の夢なんて無い。だから将来の私のために行動に移すことはできない。しかし、明日の私の理想の姿はある。だから明日の私のために行動に移すことができる。私は私のやれることをやっていきたいと思う。周りの人たちに比べると少し遅れているかもしれない。だが、明日へ、明日へと進んでいけば着実に将来の私へと繋がっていくと信じている。

私は自分の「志」を持つことに臆病になっていた。それは「志」というのを遠い将来の夢のように感じていたからだ。だが、それは間違っていることに気が付いた。遠い将来でなくても、明日の私のために「志」を持つていい。たとえ小さなことでも、『これが私の「志」だ』と胸を張って掲げてもいいのだ。私の「志」は勉強を自分から進んでやる姿勢を持つこと。たとえばゲームを止めて帰ったらすぐ机に向かう、というような自分から動く姿勢だ。将来の夢とはほど遠い「志」ではあるけれど、これは将来の夢への大きな一歩である。私はこの歩みを止めないよう、日々努力していくと誓う。

夢への道のり

岐阜県恵那市立岩田中学校一年

深萱 雅楽ふかがや うちた

「看護師」それが私の夢です。

私には十才の弟と八才の妹がいます。しかし、妹は去年十月二十五日、病気で亡くなりました。

妹の病気が分かったのは二年前、妹が六歳の時でした。ある日から、急にご飯を食べこぼしたり、何もないところでころんだり、様子がおかしくなりました。不信に思った両親が病院につれていくと、「小児脳幹部グリオーマ」と診断され、入院することになりました。近くの市民病院なら何度か入院した事があったけど、これから妹が入院するのは名古屋の大きな病院です。私も不安になってきて、ネットで小児脳幹部グリオーマについてたくさん調べました。すると、こんな一文が目にとまりました。「脳しゅよう、小児がんの一種。最終的には嚥下障害で肺炎を併発したり、呼吸困難や心肺停止により死を迎える。一年生存率は五十%」。私は胸が詰まりました。あんなに元気だった妹が居なくなるなんて、信じられなかったし、信じたくありませんでした。

それから妹は何度も入退院をくりかえしました。妹の入院中は毎日学校終わりにおみまいに行きました。病院につくと妹の病室にはいつも看護師さんがいて、お世話をしてくれていました。私はそれ

を見て、「私もこんなふうになりたい」と憧れるようになりました。その後妹は、一年にわたり放射線治療やこうがんざい治療を主に続けましたが、願い届かず他界しました。

私にとって、妹の居ない日々はものすごく辛いものでした。いつもなら家族五人ならんでいる食たくに、妹の姿はありません。時には、友達がきょうだいとけんかして、ぐちを聞かされることもあり、普段は私も思っていたことだけど、それがとても辛く、うらやましいとまで感じて、何気ない日常があたりまえではない事に気づきました。

今回妹の闘病を通して世界中には病気で苦しむ人々がたくさんいる事を知りました。私は看護師になってそんな人々を助けたいです。妹が亡くなって約一年。悲しみは時間とともに大きくなっている気がします。でも、その悲しみを力に変え、夢を実現させるために、妹の死から学んだたくさんのかを生かしていきたいです。どんな時も、妹が見守ってくれていると信じて。

大切な二つのこと

東京都・実践女子学園中学校一年 守永 幸叶もりなが ゆきか

「いつまでこんなに辛い日々が続くのだろうか。」私は新型コロナウイルスが流行し始めてからよくこう思うようになった。なぜなら

このウィルスの影響で様々な楽しみが失われていったからだ。

実際に私も楽しみが失われたことがある。小学校六年生の時の修学旅行や移動教室など、全ての予定がこのウィルスにより中止になった。すごく悲しくて、辛かった。この苦しみを味わっているのは最高学年に限ったことではない。他学年も、楽しみにしていた行事が中止になり、悲しい思いをしていた。私は絶望していた。「はあ、このまま私の小学校生活は終わってしまうのか。」と。しかし、私の小学校は、運動会と音楽会どちらとも、コロナ禍の中、開催することができた。

コロナなのに、先生達はどうにかしてでも私たちのために運動会や音楽会を開きたいとおっしゃってください、先生方が必死に方法を考えていたのだ。そこで先生方が思い付いたのは、生配信型のオンライン運動会だった。正直私は今までの運動会と違う形になり、凄く嫌だと思った。「運動会って、お客さんがその場で生で見られるからいいんじゃないの？ 何故わざわざ生配信で？」と思うくらい嫌だった。しかし、私は新たな視点からも考えた。「こんなに私たちのことを考えてくれたからこそ、先生方は生配信になっってしまうが、少しでも私たちが輝ける場所を作ってくださいたのではないか。」と。ここで私は新たに気づいた。運動会や音楽会など、お客さんを楽しませるだけではなく、先生方に感謝を伝える行事でもあるのかと気づかされた。そこからはもっとも練習を頑張るやる気が出てきた。無事、運動会を終えることができた。

私はここで物事を一つの視点だけで考えるのではなく、様々な視点

から考えることの大切さを学んだ。それだけではない。できないことをずっとできないと思いつけないことの大切さも知ることができた。

まず、物事を一つの視点だけでなく、他の視点でも見ることにについて。私はおそらく「生配信で運動会かぁ。」などと落ちこんだままだったら絶対に良い運動会にならなかったと思う。だからこそ別の視点で物事を見ることは自分の中での達成感につながっていくと思う。

次に、できないことをできないと思いつけないことの大切さについて。私はずっと、今年はきっと運動会だめだろうなと考えていた。しかし、できる方法を先生方が考えてくださり、開催することができた。できないできないと思いつけずと、段々ネガティブになり、本当にできなくなってしまう。できないことをできるに変える方法を考えることも大切だと思う。

私が今世界に伝えたいことは、物事を他の視点で見ること、できないをできないと思いつけないこの二つだ。

佳作

僕にできること

岐阜県恵那市立山岡中学校三年 糟谷 暁

二〇二〇年、三月。新型コロナウイルスによって、学校が休校になりました。突然の長期休暇。今まで通りの生活がうばわれ、自分の所属しているサッカークラブも、平日の夜練習二回、土日の練習、

公式戦、全てなくなりました。今まで何げなく暮らしていた生活がうばわれて初めて、日常がありがたいものだと感じました。所属チームの練習がなくなったことによって体がなまってしまうことがいやだったため、毎日自主練習を行いました。でも、サッカーはチームスポーツなので、一人でできる練習は少なく、ランニングやドリフティングしかできなかったため、ものすごく退屈していました。そこで「広い場所で自主練習がしたい。」と思い、学校のグラウンドに通い始めました。

五月末。いつも通り自主練習の準備をし、ヘルメットをかぶり自転車で家の前の坂をくだり始めました。気がつくと僕はどてに倒れていました。知らないおじさんの声で目を覚ましたが、何が起ったのか分からないパニックと体の痛みで動けませんでした。その後、救急車で運ばれました。あとから聞いた話によると、僕は自転車でガードレールに衝突し、宙を舞って転倒したようです。幸い大きなケガはなくすり傷だけで済みました。

僕はこの出来事で二つのことを学びました。

一つ目は、地域の方々に支えられているということです。僕を助けてくださったおじさんは、僕と同じ地域の方でした。今まで毎日毎日町内放送で小中学校から、

「いつも私たちの安全を見守ってください、ありがとうございます」という放送が流れます。ですが、今まで八年間登下校中に「見守られている」と実感したことはありませんでした。しかし、この出来事を通して、私たちが安全に学校生活を送れているのは、地域の

方々の支えがあるからだということに気づかされました。

二つ目は、僕が地域のためにできることは何か考えさせられたことです。僕は、すり傷が治ってから助けてくださったおじさんにお礼を伝えるに行きました。その後僕は、この恩を何かの形で返したいと思いました。地域の方との関わりを大切にしたいと思ったのであいさつを頑張りました。すると少しずつあいさつが返ってきてうれしかったです。今でも継続していて、明るい気持ちで生活ができています。これから僕たちが必要とされる、資源回収や花火大会のボランティアに積極的に参加していきたいです。

この出来事を体験して、僕は支えられて生きていることを改めて感じました。地域の方との関わりを大切に生活することで、楽しく暮らすことができることはもちろん、安全に生活することにつながっていくことが分かりました。これからの中学校生活で、恩返しができるように、地域にこうけんしていききたいと思ったし、次は僕が地域をより上げていけるように成長したいと思いました。

佳作

感謝と挑戦

岐阜県・多治見西高等学校二年 木村 優希

感謝と挑戦。それが私の志です。いつの日か、私の母が私の母子手帳を見ながら、涙を流していたことを思い出します。どうして泣

いているのか、小学生だった私にはまだ理解できなかったのにこの光景は覚えています。「なんで泣いているの。」そう聞くと、「優希が産まれてきてくれて嬉しい。」と返されました。私の母はシングルマザーで、でもこれといって他の家庭との違いは感じていませんでした。普段から、ベタベタと甘やかされている訳でもなく、怒られる時は怒られる。母に特別感も感じたことはなかったです。どんな人がお母さんでもいい、○○ちゃんのお母さんの方が優しいそう、とさえ思っていた気がします。でも、月日を重ね、大人に近づいた今、あの日の母の涙を思い返すと、やはり私の母はこの人であり、この人でなきゃ駄目なのだと思います。上手く言葉に出来ない感情なのですが、自分のことを想って涙を流したこの人を一生離してはいけない気がします。母がお腹痛めて命懸けで産んでくれたこと、昼夜問わず働き、私をここまで育ててくれたこと、母が居なければ私は今居ないこと、私に生きる幸せを教えてくれたこと。全てに今は感謝の気持ちがあります。そして、もちろん母のおかげで生きていられるのですが、私を取り巻く環境にも「ありがとう」の思いがあります。私が生きていくために、家族、友達、先生、いとこ、近所の人、スーパ―で働いている人、農家の人、たくさんの方の力が私に少なからず与えられているんだなと気づきます。こうやって生きていくことは当たり前のように、当たり前じゃないのです。私はこの環境に感謝して、そして少しでも他人の力になれるように生きていきます。

もう一つの私の志、挑戦。昔の自分ってすごく挑戦的で積極的な

人だったな、と思います。授業中はすぐに挙手するし、リーダーや生徒会に立候補するし。でもいつの間にかエネルギーな私の心は落ち着いてしまいました。どうしても自信が無くなって、周りの目が気になってしまいます。多分、周りの人は私のことなんて、そんなに気にしていないだろう。そう思っても中々、一歩が踏み出せません。過去の私は知っているはず。挑戦した人にしか味わえない感情と光景を。必ずその経験が今の、未来の私を良い方向に導いてくれると信じています。だから、「自信を持つて、どうなってもいい、やってみろ。」と自分を鼓舞して、学生のうちにたくさん失敗して自分というものを創っていききたいです。二つの志を持つて歩んでいきます。

佳作

舞台から伝えたいこと

東京都・実践女子学園中学校一年 丸山 奈那子まるやま ななこ

私は生まれたときから体を動かすこと、人を楽しませること、そして音楽が好きで、幼稚園の頃からクラシックバレエ・日本舞踊・テニス・ピアノ・三味線を自分の希望で習い出しました。

小学校三年生のクリスマスで少林拳のDVDをプレゼントしてもらい一年がかりで両親を説得して四年生で少林拳道場に入門しました。そして、その年の西日本大会で優勝し、翌年五年生で台湾で開

催された国際大会に出場し準優勝しました。

私はこのように沢山の習い事をしてきましたが自分が将来どこに向かって行くのか、自分のやりたいことって本当は何なのか、全くわからずにいました。

そんな時、母と、あるミュージカルを観劇し衝撃を受けました。後方の席から観ても伝わってくる役者さんのオーラやパワー、迫力のある生演奏に私は圧倒されて、舞台の世界に引き込まれて、まるで登場人物の人生を生きたような気持ちになりました。舞台の幕が下りた瞬間、私は自分の特技や好きなことを活かすことができる目指す道はこれだとひらめきました。

その後、それまで他人事のように感じていた受験勉強に取り組む、中高一貫の中学校に無事入学し演劇部に入学しました。習い事を整理して新しく声楽を学び出し、歌舞伎、日本舞踊、ダンス、演劇など色々な舞台を見て勉強しようと胸が躍るような気分でしたが、新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい、部活動も舞台を見る機会も習い事をする機会も減ってしまいました。

コロナが蔓延する世の中では、舞台やエンターテインメントは不要不急のものだと考える人も沢山いて、確かにその意見も理解はできるけれど、私は悲しい気持ちでいっぱいになりました。

しかし、自分なりにじっくり考えてみるとこのような困難な時にこそ、せめて一時でも辛い現実を忘れ新しい世界を経験させて生きる力をくれる舞台は人々を救うのではないかとという考えに至りました。

さらに、明るく愉快な舞台を観客が楽しむだけではなく、差別を

受けたり理不尽な立場に置かれたりして苦しんでいる人々や、自己と敵対している人々、違う考え方や文化を持つ人々、年齢や性別が異なる人々など様々な人の人生を舞台を通じて追体験することにより、世界中の様々な問題をもっと身近に感じることが出来るのではないかと考えました。

他の人への想像力や問題を身近に感じることは、他の人への思いやりにつながり、思いやりは平和な世界への一歩になるのではないかと思います。

そしてその一歩を作り出す手助けができるような舞台人になりたい！と今は心から願っています。

私の願いをかなえるためには、演技や歌やダンスの練習はもちろんのこと、自分自身の視野を広げるために、まずは自分の国の伝統や文化を知ること、世界の情報を知る基礎となる学校の勉強をしっかりすること、そして知識を得るための読書を頑張りたいと心を決めました。

そして、世界の人々の意見を聞いたり自分の考えを世界に向けて発信したりするために必要な英語にもコツコツ取り組みたいと思っています。

人にとって自分の得意なことでは他の人を喜ばせることができるほど幸せで幸運なことはないと思います。

私は運動神経や家族や社会環境にとても恵まれているという自覚を持っています。この自分の幸運を活かして、もっと努力をして幅広い人達の役に立つことが私の志です。

人に感動を！

山形県米沢市立第一中学校一年

目崎 尋也 めさき ひろや

「なせば成る なさねば成らぬ 何事も 成らぬは人の なさぬなりけり」

これは、上杉鷹山公の言葉で、「一事を企てて成功しないのは、やっている本人にやる気がないから」という教えが込められている。

米沢市が世界に誇れる上杉鷹山公。かつてジョン・F・ケネディ大統領は「最も尊敬する日本人は？」と日本人記者団に質問され、「上杉鷹山公」と答えた。数年前、その娘のキャロライン氏が父の想いを確かめるために米沢を訪問された。ものすごいフィーバーだった事を覚えている。また、市内の小、中学校の体育館には必ず、上杉謙信公と上杉鷹山公の大きな肖像画が左右に掲げられている。僕にとってはとても身近に感じる人物だ。そして、その肖像画を見るたび、上杉鷹山公の「なせば成る、受けつぎて」、上杉謙信公の「九月十三夜」が浮かんで来る。

実は僕は、周りの仲間にはずっと隠してきた習い事がある。それは詩吟だ。幼稚園の年中から始めて今に至っている。「なせば成る、受けつぎて」も、「九月十三夜」も詩吟の吟題で何回か発表した。詩吟を始めた当時は、三十数名いた子供会員も、今では六人になってしまった。いつかの発表会で、幼稚園児から高校生までの十一人で

「雨ニモマケズ」を大合吟したことがあった。その時、会場から「日本一！」という声援が飛んで来た。驚きと同時にとてもうれしかった。あの感動は今でも忘れられない。みんな志を一つにした瞬間だった。

今は、コロナウィルスの影響で舞台にも上がれない。一日も早く解決して、元の状態に戻ってほしい。僕は毎週木曜日、隣町の平先生のとこで一時間半お習いする。今まで、たくさん漢詩や詩、五・七・五・七の和歌、五・七・五の俳句、また近代詩や現代詩をお習いし、日本語の響きやリズムの美しさに気づく事ができた。それらの詩を詩吟教場で、大きな声で吟じると、不思議に体全体に力がいまじり、「ようし、がんばるぞ！」という勇気が湧いてくる。日本古来の伝統文化である詩吟を絶やしてはならないと思った。

これまで大きな大会にも参加してきたが、中学生になって、声変わりが始まり、思うように声がでなくなった。今はちよつと挫折を味わっている。でも、僕は鷹山公の「なせば成る」をはじめ、詩歌を吟ずる事が、とにかく好きで、ひたすら長く続けてきたのだ。ここで改めて鷹山公から学ぼう！ 自分の危機の打開策を見つけよう！ これから自分は何が出来るのか、自分は何をするべきかを考えるいい機会となっている。

これからも郷土の詩人や偉人が残した優れた詩歌を受けつぎ、さらに頑張っていきたい。そして、舞台ではなくさんの人に感動してもらえぬ吟をやりたい。これが、今の僕の「志」だ。

人にやさしい社会にするために

東京都・実践女子学園中学校三年 渡部 真生^{わたなべ まお}

私はボランティアに興味があります。きっかけは両親が色々なボランティアをしているからです。父は仕事で社会貢献活動をしていて、アフリカで一番貧しいタンザニアにクリニックカーを届けたり、ガン予防のイベントに参加したり、母は東日本大地震震災復旧のため寄付し、インドに住んでいた時にはアクセサリーを作って売ったお金を貧しい施設に寄付していました。その姿を見て自然と人の喜ぶ事が自分にとっても幸せな事だと思ったからです。

また具体的に自分は今何ができるのかを考えて実際に実行してみました。主に四つあります。

一つ目は、ヘアドネーションです。私は昨年、長くのばしていた髪を思いきって切り、ヘアドネーションしました。その髪は、事故やガンなどの病気でカツラが必要になった人に活用されます。

二つ目は、今年の夏、学校のボランティアプロジェクトに参加したことです。中学一年生から中学三年生の数十人が集まってティッシュケースを作ります。そして出来上がったティッシュケースを校内で売り、売れたお金は貧しい人々に寄付します。

三つ目は、捨てられたり、悪徳ブリーダーからレスキューされたりして、保健所で殺処分されそうになっている動物のために、食べ

物やトイレシートや不用になったタオルなどの物資を保健所や動物の保護をしているNPO等に送る事です。

最後に四つ目は、着なくなった服、バッグ、食器や食品を寄付することです。NGOの団体にバッグや食器などを送り、海外の恵まれない国に送ったり、国内のシングルマザーや施設に寄付する所に送っています。

次に将来やりたいボランティアは、子供食堂をすることです。現在、生活が苦しい子供達は日本で六人に一人といわれています。また、食事は成長していくためにも心を育てるためにも大切です。病気になる人が多い今、食事や生活、運動、ストレス対策はとても大切です。これらを人に伝えることができれば、沢山の人が病気を予防することが出来ます。生きていく上で健康的な体はなくてはならないものです。なので、人に健康を伝える事も行いたいと思います。ボランティアを必要とする場所には様々な問題があります。その事を知り、ふれることで、困っている人の立場になって問題意識を持つことができるようになるのではないかと思います。自分で行動をおこし、少しでも多くの人の抱える悩みや苦しみをやわらげる事ができたらうれしいです。

また、ボランティアを行う意識の高い人との出会いは自分を成長させてくれると思います。

「人間は一人では生きていけない」

この言葉にあるように一生懸命生きていても思いがけない不幸で誰かの助けが必要になることもあります。私も知らず知らずの中で

人に助けて頂いていることが沢山あると思います。どんなに小さなことでもボランティアをすることは世の中に小さな灯をともし事だと思っています。これからも人にやさしい社会になる様に自分にできる事を探していきたいと思います。

おうめい 嚶鳴協議会と嚶鳴フォーラム

嚶鳴フォーラム

嚶鳴協議会は、ふるさとの先人の事績や教えをまちづくり、人づくり、心そだてに活かしている自治体が、情報交換や交流、連携を通してよりよき地域づくりを探るための協議会です。「嚶鳴」とは、中国最古の詩集『詩経』に出てくる言葉で、鳥が仲間を求めて鳴き交うという意味。転じて、仲間が集まり切磋琢磨しながら学び合い教え合うことを意味します。名君・上杉鷹山の師として名高い愛知県東海市出身の儒学者・細井平洲が江戸に開いた私塾を「嚶鳴館」と名づけたことでも有名です。

加盟自治体を持ち回りで毎年開催する「嚶鳴フォーラム」を中心に、市町長会議、教育長会議、行政職員や市民の交流事業等活発な活動を行っています。恵那市では、佐藤一斎没後百五十年を記念して、平成二十一（二〇〇九）年に「大人たちが学べべきこと、親学…」をテーマに第三回目の嚶鳴フォーラムを開催しました。そし

て、本年（令和四年）、佐藤一斎先生生誕二百五十年を記念して、佐藤一斎先生を中心に、恵那市ゆかりの先人を通して、これからのまちづくり、人づくり、心そだてを探る「嚶鳴フォーラムin恵那」を開催することになりました。本年度の第十九回下田歌子賞事業もその関連事業として位置づけています。

嚶鳴協議会賞

嚶鳴協議会では、平成二十一（二〇一〇）年度より、嚶鳴協議会加盟自治体が行なう公募事業等の中で、協議会の趣旨に添った事業に対して「嚶鳴協議会賞」を授与しています。下田歌子賞事業では、同年の第八回より第十三回（平成二十七年）まではエッセイ募集小学生の部、中学生の部、一般の部それぞれに、嚶鳴協議会賞一作品を授与。平成二十八（二〇一六）年度より、小学生の部・中学生の部の入賞者を対象に、表彰式当日、自分の作品を朗読する朗読コ

ンテストを実施し、会場参加者の審査により、各都上位三名に嚶鳴協議会賞を授与してきましたが、コロナ禍により昨年度（令和二年度）と本年度は、朗読コンテストと嚶鳴協議会賞の授与を中止しています。

【嚶鳴協議会加盟自治体（令和三年十二月現在）】恵那市 大野町 沖縄市 小田原市 釜石市 木曽町 高鍋町 多久市 竹田市 田原市 東海市 長野市 日田市 養父市 米沢市

【企画運営協力】PHP研究所
 【事務局】愛知県東海市教育委員会社会教育課内

【ホームページ】<https://oumei-forum.tokai-arts.jp/>



嚶鳴協議会

第
19
回
下
田
歌
子
賞
受
賞
作
品

一般の部

恵那市民が選ぶ「志」の歌

創りたい 自立と調和の 人の森
恵那の自然の 声を聴きつつ 貴子詠

創りたい 自立と調和の 人の森
恵那の自然の 声を聴きつつ

岐阜県恵那市
宇野 貴子

生きたって 自分を信じ 登る山
曲りくねった道もまた道 昌元詠

生きるって 自分を信じ 登る山
曲りくねった 道もまた道

福岡県志免町
奥田 昌元

先見えぬ 今こそ強く志
遠い未来に光を放つ 繭子詠



先見えぬ 今こそ強く 志
遠い未来に 光を放つ

大阪府堺市
田中 繭子 たなか まゆこ

補欠でもいつも笑顔で行く君の
背中に大志 強く感じる 弘美詠



補欠でも いつも笑顔で 行く君の
背中に大志 強く感じる

岐阜県関市
古川 弘美 ふるがわ ひろみ

「ねえ、母さん、丸い背中に 夢語る
黄昏キッチン ゆうげの香り 由季詠



「ねえ、母さん」 丸い背中に 夢語る
黄昏キッチン ゆうげの香り

埼玉県さいたま市
宮澤 由季 みやざわ ゆき

帰郷

鹿児島県日置市 小平 竜平
こびらりゅうへい

松山港から夕方のフェリーに乗って、初めて故郷を出た。少年時代からの夢だった電気エンジニアになるために、就職先の重電メーカーのある東京へと向かった。今から三十年前のことである。その日も瀬戸内海は、いつものように穏やかで、島々の入江には小さな漁船が浮かび、岸壁を淡い夕日が照らしていた。一生変わることのない僕の原風景がここにある。

本社で三年間の研修を終えて、パキスタンの火力発電所建設に赴任した。電力インフラが整備されていないこの国での、まさしく国家プロジェクトだった。政情不安で、テロに巻き込まれる不安と宿舍から現場までの道のりにある地雷の恐怖、毎日が命の危険と背中合わせの日々だった。それでも竣工して、砂漠の中のオアシスの街に、煌々と照明が点灯した時、地元の人々が大きな歓声を上げてくれた。その瞬間、僕は何物にも代えがたい技術者としての喜びを知った。

パキスタンを皮切りに、中東やアフリカの国々で電気インフラの開発に携わり続けた。その都度、技術者としての充足感を得られたけれど、一人の人間としての誇らしさは少しずつ薄れていった。なぜなら、赴任した地域の発電所開発は、その国の特権階級の利権に

寄与するばかりで、一般の国民の利益にはつながらなかったからだ。日本では考えられないほどの貧富の差が存在し、僕たちの仕事は、そのことを増大させるばかりだった。悲しいまでの社会の矛盾を、僕は海外赴任の間ずっと見続けた。

海外赴任を終えた頃、四十歳になっていた。帰国した時、日本の高度成長時代はとくに終わり、バブル崩壊も終えて、成熟した社会に変わっていた。情熱と前進するエネルギーに満ち溢れた日本はもうそこにはない。システム化され、閉塞感を心の底に抱えた日本人が、この国には溢れていた。

そんな静かな日常を切り裂くように、東日本大震災が起こり、福島第一原発が爆発した。放射能が拡散し、街の封鎖と住民の避難が始まる。人々は故郷をなくした。地方に生まれた僕は「故郷消滅」という現実を受け入れられない、自分と重ねた時、あの瀬戸内海の原風景が地上から失われるということを想像できない。

僕たちのような電気エンジニアにとって、原発事故は他人ごとではなかった。原発に携わっていた技術者のことを思う時、海外での開発に携わっていた自分と重ね合わせる。原発の技術者は、巨大化し続ける東京の電力需要を安定供給することに誇りを持っていたと思う。あるいは海外頼みの石油やガスに頼らない最良の国産エネルギーだと胸を張っていたことだと思う。自分も同じだった。電力インフラのない国に、新たなインフラを作ることとは、その国に役立つことだと思っていた。それでも現実には、そんなに単純ではない。僕たちの開発は、結果としてその国の特権階級に加担し、その国の貧

富の差の拡大につながっていった。原発は結果として、いくつかの街を消滅させた。残念ながら、組織人としてのタスクと一人の人間としての思いが同調することはなかった。僕たちのジレンマは、いつもそこにある。

原発事故から後、日本は再生可能エネルギーの普及に舵を切った。僕の配属も、風力発電所の開発部隊へと移った。開発依頼を主に地方の自治体から受託して、全国を回った。地方では急速に高齢化と人口減少が進み始めていたから、衰退に歯止めをかける起爆剤として期待されたのだ。数年後、秋田にある小さな街から、地域エネルギー会社設立の相談を受けた。開発した風力発電所を電源として、地産地消のエネルギーを供給する会社を作りたいといわれた。電力の自由化が始まったのだ。そして紆余曲折がありながらも、何とか設立にこぎつけた。小さな会社だったけど、地域の未来への思いに溢れていた。そして職員として、東京の研究所や電力会社から数人が、秋田へとUターンしてきた。海外での国家プロジェクトから考えれば、本当に小さな仕事だったけど、そしてとても小さな地域再生の始まりだったけど、僕の技術と地域の未来への渴望が合致したのだと思う。この仕事には、今まで感じ続けたようなジレンマはどこにも存在しなかったのだ。「ぼくの仕事の集大成は、電気を通して地域の再生に貢献することではないだろうか？」そんな思いが頭をよぎる。そして同時に故郷のことが思い出された。僕がこれまで体験し、習得した技術のすべてを、僕をはぐくみ育ててくれた故郷の再生に役立てたい。僕の心の原風景が、僕を呼んでいる。もうそ

の思いを抑えることはできなかった。そして五十歳になった時、僕は会社を辞めて帰郷する決意を固めた。

僕は瀬戸内海を松山へと向かうフェリーの中にいる。三十年前と何も変わらない穏やかな原風景がここにある。「ぼくの仕事の集大成が、今ここから始まる！」僕は心の中で叫んでいた。

優秀賞

つなぐという使命

東京都清瀬市 小松崎潤こまつざき じゅん

もし大切な人の最期に立ち会えなかったら。老人ホームに勤めて十七年。今もそんなことを考える。

あれは去年の二月のこと。施設の嘱託医がヤスさんの奥様に言った。

「ご主人の命はこのままですと、あと二ヶ月ほどですが、延命治療をしますか？」

実を言うとヤスさんは前年秋に腸閉塞の手術をしている。それ以来、食が細くなり、自室にこもることが多くなった。

「命を助けてほしいければ、すぐに救急車で大病院に運ぶ必要があります。運ばなければ亡くなります」

救命か看取りか。命の決断は介護のキーパーソンである奥様に委ねられた。

「延命治療は望みません」

奥様はどこか言い聞かせるように言った。聞けばヤスさんは二年ほど前、日本尊厳死協会が行っているリビングウィルに加入していた。つまり「延命治療は望まない」という意思カードを持っていた。その後ヤスさんの担当である私と奥様との間で話し合いがもたれた。

「最期は家族に囲まれて死にたいと申し立てました」

ご本人の願いを知り、望む通りの最期を叶えることは、ご本人のためだけではなく、遺されるご家族の救いにもつながる。

「かしこまりました。できる限りサポートさせていただきます」

私がそう言うのと奥様は安堵の表情を浮かべた。

しかし三月に入ると事態は一変。新型コロナウイルスの感染拡大を受け、面会が全面禁止になった。そのことを施設の玄関で知った奥様は取り乱した。

「主人はもう死ぬんですよ。死に目にも会えないって言うんですか」

その声の強さで警備員がかけつけた。私も「とりあえずこっちへ」と言いながら玄関の外に招こうとした。その時だ。奥様が私の両腕を強く掴んだ。

「もう死ぬのにどうして会えないのよ！ いつになったら会えるのよ！」

思わず息を飲んだ。終末期に会えない理由を説明するのは難しい。ただどいつ会えるかを言うのは、もっと、難しい。

「なんでよ…言いなさいよ。ねえ」

掴んでいた手がもっと強くなる。だけど僅かに震えるのを感じる。

「…ごめんなさい」

頭で考えた言葉ではなかった。勝手に喉を突き上げるように声が出た。そのあとはもう言葉にならなかった。奥様は「なんで、なんで」を繰り返し、最後は床に泣き崩れた。

「面会を開始してください」

緊急事態宣言が解除されはじめての職員会議。そこで私は上層部に申し出た。しかし施設長は引き続き面会を中止することを発表した。

「なぜですか！ 宣言は解除され、感染者数は減っているじゃないですか！」

たまらず私が声を荒げると「君は何を言っているんだ！ ウチは高齢者を預かっているんだ。感染すれば即死だぞ」と叱られてしまった。

「窓越し面会しかない」

私は悩んだ末に同僚と企画書を提出した。すると企画は通った。しかし「週三回」は「週一回」に、面会時間は「三十分」から「五分」に修正された。何だか悔しくて、やるせない。それでもヤスさんの奥様は「やっと会える」と声を詰まらせた。

こうして始まった面会はテラスとリビングを隔てる窓越しに行われた。

「ああ…あなた」

窓越しに現れたヤスさんを見て、奥様はガラスに張り付いた。

「お…お…」

さっきまでぐったりしていたヤスさんも必死に手を伸ばす。ガラス越しに合わさるふたつの手。本当はこの手を繋いであげたかった。面会から五日後、ヤスさんの容態が急変した。すぐにご家族が駆けつけたものの、娘さんは他県在住のため施設に入れない。

「なんで…」

誰もがそう思った。どんなに理屈で納得しようとしても、決して消えない感情がある。怒りや、悔しさ、不甲斐なさ。それらを抱え、奥様だけがヤスさんの元へ急ぐ。

「あなた！ あなた！ あなた！」

廊下まで聞こえる声。その声が耳ではなく、胸に響いた。

（このままでいいわけがない）

私はたまらず外の娘さんに電話をかけた。

「今からお父様に代わります。声をかけてあげてください！」
すると娘さんは必死で呼びかけた。

「お父さん！ 聞こえる？ わたしだよ！」

そのときだ。ヤスさんの血圧がスーッと下がった。まるで娘さんの到着を待っていたかのように。

コロナ禍となって一年弱。我々は「これまでに」にはなかった「これから」を生きるしかなくなった。大切な人の最期。そこに立ち会いたくても叶わなかった人がたくさんいる。だけどヤスさんの娘さ

んは「最期には立ち会えなかったけれどありがとうと伝えられて幸せだった」と言った。つまり僕ら介護士が本当にやるべきことは一人一人の想いをつなぐことなんだ。

「ありがとう」と言えたら感謝が続く。

「ごめん」と言えたら歩み寄れる。

「またね」と言えたら明日につながる。

そんな世界を変える言葉を我々一人一人が持っている。

残されたわずかな時間。誰もが大切な人に想いを伝えて欲しいし、その手助けができたらい。皆が笑顔になれば、もっと、いい。今は悔しい思いもある。だけど私は諦めない。これからも一人一人の想いを、笑顔を、どんなカタチでもつないでいきたい。

優秀賞

この腕を大きく広げて

京都府京都市 田島 美咲

十七歳。まだわたしはわたしでなかった頃。自分が何者になれるかが分からず、でもわたしはいつの日か何者かに、立派な何者になれるはずだと信じ、しかし一向に訪れない兆候のため息ばかり吐いて、ただ制服を身に纏ってがたく机に座っていただけの頃。

そんな十七歳の初夏、わたしは物語の持つ力を知ってしまった。金がないからとエアコンがつかない公立校の教室で、現代文の時間

に開かれたのは『山月記』のページ。

蒸し暑い。蒸し暑いけれど、そんなこと気にもならないくらいに、ゾクゾクした。鳥肌が立って、あふれそうなものをグツと飲み込んだ。

ねえどうしてこの物語は、こんなにもわたしの気持ちをわかってくれるの？ 何者かになれると、いつか大成できると信じて、友人を見下し、わかったようなため息を吐くわたしを、どうしてこの物語は描き出してくるの？ わたしもいつか人喰い虎になってしまっ

あ。あの初夏の教室の衝撃が、秋になっても冬になっても、忘れられなかった。そしてわたしは、立派な何者かになれるはずだという幻想を捨て、国語の教師を志した。

ようやくわたしは、わたしという人間の輪郭を得た。何者か、ではなくて、物語を継承し続ける存在になるのだ、という確固たる志を胸に抱いて。

あれから十年経った。二十七歳のわたしは、国語の教師として教壇に立っている。古典文学の今につながる普遍性を説き、文法の緻密さを称揚し、そして、あの頃のわたしを掬い上げてくれた近現代文学たちを次世代の少年少女たちに伝えている。

社会に羽ばたける人材を育成しようとか、一人一人の可能性を最大限にまで伸ばしてやろうとか、素晴らしい青春時代の体験をさせてやりたいだとか、そんな立派な思いを抱いた教師ではない。褒められた存在ではない。

でも、かつて十七歳だったわたしは、いま十七歳の彼ら彼女らに、伝え続けていきたいと切に願ってしまった。

この砕け散りそうな心。理想と現実の乖離に心が追いつかず、悲鳴をあげる身体を抱えていたわたし。いつか何者かに、と曖昧模糊たるしかし燃え上がる情念だけで息をしていたあの頃のわたしは、確かに物語に救われた。

このわたしの軀んだ心と身体を理解し、表現し、掬い上げてくれる言葉がある。物語がある。このことが、どれだけわたしを生かしてきたか。十七歳の頃から、どれだけわたしを奮い立たせてきたか。

立派な教師ではない。それでも、この、一人の人間を掬い上げる力を持つ物語という存在を、何としてでも次世代につなげていきたい。そして目の前にいる少年少女、誰か一人でも掬い上げられ、救われたなら。その一心で教壇に立っている。

しかし、この腕を大きく広げたとして、共に教室で物語を読んだとして、限界はすぐに来てしまう。一学年二百四十人とともに読んだ物語たちは、一体何人を掬い上げただろうか。一人でもいたら上出来で、ゼロだったとしても仕方がない。

でも、それでも、わたしが掬い上げられて欲しいと願っているのは、救われて欲しいと願っているのは、心と身体が乖離して息がうまくできない全ての少年少女たちなのだ、とふと思う。砕けた心の破片をかき集めようとする、全ての少年少女たちに、物語という、人を生かし続ける可能性を秘めたものを与えたいのだ。

与えるだけ与えて、さあ読め、なんて横暴なことではなく。さあ

感じる、なんていう粗雑なことではなく。もっともっと、物語の持つ力を正確に、明瞭に、つなぎ続けていきたいのだ。

そのための力が、言葉の力が、わたしにはまだまだ足りなくて。じゃあどうすればいい？ 救えなかったあのことを、わたしはどうしたら救える？

教師になって五年が経った。わたしがこの腕を大きく広げたとして、二百四十人にしか届かずに、あのこを掬い上げ救い出すことができないならば、わたしはもっともっと大きく強くしなやかに、この腕を広げていかねばならない。

そのために必要なのは勉強だ。物語の持つ力を正確に、明瞭に、つなぎ続けていくために、わたしに今必要なのは勉強だ。

わたしはもうすでにわたしであって、何者かではなく教師になって、自分で選んだ服を着て、エアコンの効いた教室で生きている。でも、制服を着てため息を吐いて、砕け散りそうな心を必死で守っていたわたしを掬い上げたのは、そして今に至る道を作り上げてくれたのは、あの蒸し暑い教室で語られる物語だった。ならばそれを繋げるために、わたしはもっともっと、腕を大きく広げるために、この腕に包み込めない少年少女たちに、延長された腕が届くように、勉強しよう。

文学教育について学べる大学院のパンフレットを請求したのがつい最近のこと。

この腕を大きく広げて、吐き気をこらえて自分と戦う全ての少年少女に、物語という一つの可能性をつなぎ続ける志を、まだ短い腕

を広げて考える。あのこにいつか届くように、心と身体をつなぎとめる言葉を探して、机に向かう。

優秀賞

親子でつなぐ志

愛知県豊橋市 仲川^{なかがわ} 浩^{ひろ}

「ばく、ウミガメを守ろうと思う！」

十年前の夏、小学五年生になった息子が読書感想文を書くために読んだ本に触発されてウミガメを守ると言い出しました。続けて彼は、

「ここに住んでいる人たちが保護しなかったら、ウミガメを守る人はいないんだよ。」

と、読んだ本の内容に強い影響を受けたようでした。しかし父親の私は、どうせ三日坊主で終わるからと、気にもとめずに聞いておりました。ところがその時の決意が、彼の将来を左右するほどのものになろうとは、私はその当時思ってもみませんでした。

私が住んでいる渥美半島には、浜名湖から伊良湖岬まで続く表浜十三里と呼ばれる長い砂浜が続いています。この表浜海岸には、国際的絶滅危惧種として指定されているアカウミガメが産卵に来る浜として知る人ぞ知るアカウミガメの隠れ里なのです。

私はウミガメについての知識はまったくありませんでしたので、

息子が言い出したことに對してどのように手助けしてやればいいのかわかりませんでした。そこで、すでにウミガメの保護をしている団体に頼み込み、どのようにしたらウミガメを守ることができるのかを息子に学ばせることにしました。

その初日、懇切丁寧な説明を受け、その後軽い作業をして三、四時間で活動は終わりました。そんなことを休日のに四、五回繰り返したのち、息子が不満を言い出しました。私は早くもウミガメを守ることに飽きてしまったのかと思い、息子の飽きっぱさに失望していました。しかし彼の話をよく聞くと決してそうではなかったのです。

保護団体はウミガメの将来を背負ってくれる子どもたちに対して、この運動を飽きずに長く続けてもらうために、簡単にできることからコツコツしてもらい、長い時間の拘束、手間のかかるような面倒なこと、重労働になり体力を消耗するようなことをさせませんでした。それゆえ子どもの一時の気まぐれからでなく、真剣にウミガメを保護しようと考えている息子にとって、保護活動でやることはもどかしく、歯がゆいことばかりでウミガメ保護の役に立っていないと言うのです。彼はもっと早く様々な手法を教えてもらい、実行に移さないとウミガメが絶滅してしまうと考えていたのです。それゆえ息子は焦っていました。息子は自分なりに考えて保護団体とは行動を共にしないと言いました。

息子がとった行動は、保護団体が活動しない閑散期（十、四月）に浜辺の清掃活動をするというものでした。それはウミガメ及びそ

の卵の保護自体は保護団体に任せてしまい、息子は浜辺の清掃活動、特にウミガメの産卵環境を整えることに重点を置いたのです。

その活動とは、ウミガメが好んで産卵する消波ブロックの合間の砂丘と呼ばれる部分の産卵時障害物を掘り出して除去することでした。大きな石があるとウミガメが後ろ足で砂地を掘ることができず、産卵を止めてしまいます。また産卵時の天敵は実は買物などよくもたらうレジ袋なのです。そんなものでカメが困るわけなどない、むしろペットボトルや空き缶の方が産卵の邪魔になるのではないかと思う方が多いでしょう。しかし海辺に埋まっているレジ袋は風に吹かれて飛んできて、袋を目一杯広げた状態になり、飛んで落ちたところの中に砂が入り、それが重しとなりどんどん袋の中に砂が堆積し、やがて一番膨らんだままで砂中に埋もれてゆくのです。それはまるで大きな石が砂中に埋まっている状態と同じなのです。レジ袋は朽ちることなく永久にそこに存在し続け、穴が掘れず疲れ切ったカメは産卵せず海に帰ってしまいます。

保護団体は浜辺の表面上の清掃はしますが砂中ではありません。それゆえ十月、四月までの閑散期の砂中の清掃は、翌年のウミガメの産卵環境を整えることに繋がるのです。

その清掃方法とは、折れた傘の柄を砂に二十センチ、三十センチほど刺し、てこを利用して掘り起こします。そして表面からは見えない砂中に埋もれている異物やゴミ、レジ袋を探すのです。慣れると刺しただけでレジ袋がわかるようになります。それを息子と私は七年ほど人知れずやってまいりました。

息子も高校三年生になり大学受験を迎えることになりました。彼は、

「超難関大学に合格し、将来役人になって、ウミガメの保護を上から指導できる立場の人間になろうと思う。だからそれまでお父さんには悪いと思うけど僕の志を継いで今まで通り浜辺を一人で清掃してほしい。」

と言いました。もちろん私は快諾しました。

今現在息子の志は私に引き継がれ、私の意志として浜辺の清掃活動を一人で行っています。息子は息子で頑張って勉強し、見事超難関大学に合格し勉学に励んでいます。そして将来彼がここに帰って来て、親子の志を再びバトンタッチできることを期待し、楽しみに待ち続け、清掃活動をしています。

佳作

新しい古新聞

大阪府堺市
相野^{あいの}正^{ただし}

昭和三十年ごろの村には、殆どの家にテレビはなく新聞をとっている家も多くはなかった。天涯孤独の私が育ててもらっていたのは、四国の海辺に住む曾祖父母の貧しい家。ラジオしかなかったが、中学生になる直前、ついに爺ちゃんが白黒テレビを買ってくれた。

爺ちゃんたちは優しかったが、三世代も違う価値観では納得でき

ないことも多かった。それをテレビが教えてくれることもあり、もっとうろんな番組を見たかった。だが新聞がないので放送予定がわからない。そこで爺ちゃんが、新聞を配達していた親戚のおばさんにお願いをしてくれた。古新聞でいいから、テレビ番組面だけを一週間分もらえないかと。番組は毎週それほど変わらないからだ。

笑顔で領いたおばさんは「もうすぐ番組が変わる。そのあと新しい古新聞」を持ってきてあげる」と言ってくれた。

やがておばさんは約束通り持ってきてくれた。当時の新聞紙は、トイレ紙を筆頭に様々な使い方をしたので貴重品だったが、私達のためにどこかの家に頭を下げてくれたらしい。

番組表も喜んだが、私はその裏面の記事や写真に惹かれた。テレビより詳しい世界の出来事がたくさん載っていたが、難しすぎてわからなかった。だが、瀬戸の海を越えたことがなかった私は、初めて外国に憧れた。

おばさんとはそれまで殆ど会話をしたことがなかった。身体が不自由で顔に大きなケロイドのあるおばさんは、乳母車に新聞を乗せて配達していた。それまで私はそのおばさんが怖かった。だが恩返しのため、時折乳母車を一緒に押していると、おばさんは意外に物知りで優しい人だとわかった。

「大人になったら新聞は毎日読まなアカンで。テレビより本と新聞や。特に新聞は毎日、世の中の出来事やその見方を教えてくれる。好きな種類の本ばかり読んでもアカン。いろんな考え方を知るには新聞が一番や。でも気をつけんと新聞は明日には古新聞になるんや

で。古新聞を読むようではあかん。

社会に出てからどれだけ勉強するかが大切や。学校出てからがホシマの勉強や。それは自分で探すんや。チャンスは必ずくるから」

「何のチャンス？」

「夢を叶えるチャンスや。お前の夢は？」

「遠い外国で仕事をしてみたい」

なんとなくだったが、胸に沸いていた思いを初めて口にした。小学校も途中までしか行つてないと言ったこのおばさんも本当は勉強したかったんだ。そう思った。当時は家の事情で、義務教育も十分受けていない人も少なくなかった。

高校を出た私は都会の病院で医療事務のバイトをした。そして最初の給料でまず念願の新聞購読を申し込んだ。それ以来、新聞は必ず毎日読んだ。新聞は毎日否応なく、最新の事実を伝えてくる。これらを読めと教えてくれたおばさんの言葉を実践した。

いろんな情報が飛び交っている現代でも同じだ。ネットを開けば好きな情報にアクセスでき、自分に都合のいい理屈や興味のある映像が溢れ出てくる。しかしそれだけでいいのだろうか。興味のないことでも、一度は受け止めて理解しておく必要はないのだろうか。

最初に新聞で覚えたのは、清濁併せ呑む、という言葉だった。綺麗ごとではなく、否応のない事実を受け止めて理解する。それから何をしたらいいかを考える。それが社会勉強だと思った。目的をもって本を選んで読む。書かれている記事を選ばずに最新の新聞や業界紙を読む。私にはそんな読みクセがついた。

その後、正社員として医療機器の会社に入ったが、高卒で何のスキルもない私は、まず語学だと思い、夜間の中国語学校に通った。

しばらくして偶然にも会社が中国向けビジネスを計画し、指名された。さらに米国から最先端医療機器を導入する役目をも任された。今度は英会話や薬事関係法規などを勉強していたときだった。

中国に次いで、数年間にわたって米本土で研究者と企業を探して交渉し、国に許可され、ついに日本にはまだ入っていない最先端医療機器を日本に導入することができた。初めて使用した大学病院で患者さんからお礼を言われた時、本当に夢が叶ったと思った。

「咲きたい花は必ず咲く」という言葉が好きだ。咲きたいと願って努力している花は必ず咲く。明日になれば昨日学んだことが役に立たないかもしれない。古新聞だ。だが常に前向きで勉強していれば、努力は血となり肉となつていくはず。「夢」は努力を伴って初めて「志」となる。持つだけでは不十分だ。

両親を失つてもくじけなかった私を励ましてくれたのは、爺ちゃんたちとおばさん、そして瀬戸の海だった。その青瀬に導かれて、新しい古新聞から世界に憧れた私の夢は、三十年後に小さく花開いていた。

夢の実現

大阪府寝屋川市 木俣肇^{きまた はじめ}

医学部を卒業して三年間、一般病院の小児科で昼夜兼行で研鑽し、臨床的には半人前の医師にはなっていた。そういう自負があつて、専門の臨床の知識をより深めようと母校の大学院に帰った。だが教授の意向は、「臨床はどうでも良い。研究して英語の論文を書くように。」ということ、臨床講座の教授が臨床力を認めないことに驚いた。しかも研究の指導は一切ない。更に研究に必要な道具もない。何をしてよいのか途方にくれた。カルチャーショックであつた。

大学院へ行く目的は臨床で得た経験をいかし、専門の研究をして理解を深めることである。そして論文を書き、博士号を取得する。講座によつては論文は日本語でも良い所もあつたが、私の講座は英文論文を書き、それが海外の一流の医学雑誌に掲載される必要があつた。医師ではあつたが、身分は大学院生、つまり学生ということ、とで新たに勤務する病院では非常勤となつた。当然収入も減り、生活も困難が襲つてきた。しかし、今までの人生で色々な困難を克服してきた経験から、絶対にこの苦境を乗り越えて、博士号は取るという夢を持った。

まず実験に必要な器具を自分で購入した。実験はテーマもなく何をしていいかわからない。そもそも実験の手法がわからない。

アレルギーに興味があつたので、その研究をしようと思った。講座は違うが同じような研究をしている学生時代のクラブの先輩を訪ねて、研究のノウハウを教えてもらった。手探りの研究の日々が始まつた。しかし、失敗というよりも何をしたらいいかわからないという状態で、空しさに苛まれた。これでは先に進めない。そこで開き直つた。まだインターネットもない時代である。夜は読書で、休日は映画を観て気分転換をした。そういう日々が数ヶ月続いた。研究論文を読みコネを使って研究している先輩達を訪ねて、実験の手法や使用する器具を聞きまくつた。そうして次第に一人だけの研究は形を整えていった。大学院は四年間である。二年目が終わりようやく希望が見えてきた。その時、突然教授に呼ばれ、「新しく他府県の病院に小児科を開設するので、三ヶ月赴任するように。」と言われた。せっかく研究ができてきたのに、三ヶ月も離脱することは大幅な研究の停滞を意味する。そもそも教授は臨床はどうでも良いと言つていたのに、言を翻して政治的な見地から医局員を酷使する。しかし当時は教授の命令は絶対であつた。理不尽であつたが、これは臨床の好きな私へのプレゼントと思い、赴任するからには全力を尽くそうと思つた。赴任して一人医長で診療を始めたが、今まで小児科の無い病院なので、小児専用のカルテもない。以前勤務していた病院の知り合いに電話して、カルテをファクスしてもらい、ゼロからのスタートで一人で手作りした。三ヶ月は頑張ると決めたので、毎日誠実に診療に邁進した。地域の方達は小児科ができて喜んで、受診される方も多かつた。そうして三ヶ月が過ぎた。しかし四ヶ月目に

入っても教授からは連絡が来ない。こちらから連絡したら、「忘れていた。」ということであきれ果てた。「代わりの医師を派遣するのでも少し待つように。」と言われ、結局五ヶ月赴任した。大学に戻ってすぐ研究を再開した。

その後、研究に専念し大学院三年目の終わりによりやくデータができた。早速英語で論文にして、英国の医学雑誌に投稿した。幸いにも受諾された。大学院四年目の中頃であった。これで夢はなかった。結局、四年間で一枚の論文ができただけであった。しかし、その論文で博士号はとれた。闘って夢を実現させた四年間であった。夢を追った日々であったが、最初はそれほど興味がなかった研究も、その奥深さに魅せられもつと研究したいと思うようになった。当時は研究は海外がレベルが高く、留学して研究するのが王道であった。そこで大学院卒業後、助手として大学病院に勤務し、自分の英文論文を世界の著名な研究者達に送り、留学の依頼を伝えた。幸いに米国の著名な教授が受諾してくれた。その後、米国に留学して三年間で数枚の研究論文が、米国の超一流の医学雑誌に受諾された。夢は追い続けるものである。色々な障害があろうと、強い志があれば夢はきつと叶う。

帰国してからしばらくは大学病院で基礎研究と臨床研究を続けた。やがて一般病院に赴任したが、そこでも臨床研究をして多くの英文論文を投稿して、色々な海外の医学雑誌に受諾された。そして二〇〇三年に掲載された論文が認められ、二〇一五年にイグノーベル賞を受賞した。人生は何が起こるかかわからない。落ちこぼれ医学

生の私が、小児科でアレルギーに興味をもち、研究生生活をして英語論文を書き留学もできた。その後、アレルギーの研究と臨床に興味をもち、小児科からアレルギー科に変わった。そして世界的な賞を受賞し米国で講演までして、臨床と研究を通じて、世界の医師と交友を深めた。志に乾杯。

佳作

私の志 お母さん

長野県塩尻市 堀内 三千代

「志」、この言葉から想像するのは、何か計り知れない壮大な目標……例えば将来は世の為人の為になる開発をしてノーベル賞を取るとか、感動する小説を書いて、直木賞や芥川賞を取りたい。

しかし、私の志は「母になる」ことでした。

私は曾祖母の代から続く旅館を経営している家に生まれました。当時、旅館を取り仕けるのは、私の祖母でした。

祖母は、戦争で夫を亡くした後、息子三人を連れて実家に戻り、実家の家業である旅館を経営しながら、女手一つで息子三人を育てました。

祖母は私の人生で最も尊敬する人で、私はとても可愛がってもらいました。そんな尊敬する祖母でしたが、経営者としても姑としても大変激しい人でした。私がまだ幼い頃、二つ下の妹と母と私の三

人でお風呂に入ると、母が私達姉妹に分らない様に泣いていた事を思い出します。私は母が可哀想と思いましたし、それに耐えている母の姿を目にするのは辛かったですし、悲しいものでした。

そこまでして、祖母をたてなければいけないのかと、中学生の頃は、反発さえ感じました。

母にとっては、良き嫁、そして良き妻になることが、どんな状況でも大切に、むしろその事に酔っているというか……今から思うとその様にも感じます。母の姿を見て、私達姉妹は自然と母の負担にならない様、あまり甘えることもではなかったと思います。

私自身は二十五歳で結婚し、その翌年には長男、そして六つ離れて長女を授かりました。長男の妊娠が分かった時、喜びはもちろんでしたが、不安で仕方なかったことを思い出します。何故なら、私の母はいつも忙しく働いて周囲に気をつかい生活していました。ですから母と娘の私で何かしたり、楽しい思い出というよりは、いつも嫁に徹していた母しか見てきませんでした。こんな自分が子育てできるのか、この子をひとりの人間として社会に出す為に、生きていく術を教えることができるのか、考えれば考える程、不安でした。妊娠が分かってからは、妹に相談したり、育児書なども読んでみましたが、なかなか不安は解消できませんでした。ですが、お腹が大きくなるにつれ、悩むことより自分に出来ることは生まれてくる赤ちゃんのお母さんになろうと、なんとなくその様な気持ちになっていきました。

毎日、子供や家族の為にごはんを作り、登校時には姿が見えなく

なるまで見送り、成長する間には、病気をしたり、受験があったりこのものお陰で楽しく、時には切なくて、こどもと一緒に泣いた事も、本当に沢山の経験させてもらいました。

時は流れて、大学院を卒業する息子と二人でドライブしていた時、私が息子に「誰かおつき合っている人はいいるの？」と聞くと息子は「誰もいないよ」と。私は息子にこう続けました。

「ママは、ずっと家に居て専業主婦だったけれど、今は共働きする人も多いだろうし、就職した先で、いい方に出逢えるかもしれないね。」

すると息子が、

「俺は学校から帰って来るといつもご飯が用意してあって、色々と世話をしてくれて、感謝している。」

本当に息子の思いがけない言葉でした。これまで、息子にとつて私は口うるさい母親でましてや、あたり前のことをしてきただけではない様な言葉をもらえるなんて考えたこともありませんでした。

この息子とのドライブで、私は「母になれた」気がしました。

「志」は一人一人違います。そして、私が志した「母」は、大抵の母親は志さなくてもなれます。そんなありきたりの志を持って、私は五十才を過ぎました。人生八十年とすると、約三十年程あります。

息子は社会人になり、娘は大学生です。

夫は先日、定年を迎えました。今は二匹の柴犬の世話に追われている夫の姿を横目に、これからの夫との第二の人生に、どんな「志」を持って生活しようか思案中です。

でも、私は相変わらず「母」として生きていくと思います。

息子と娘が、楽しい時、悲しい時、嬉しい時、苦しい時、どんな時もそっと見守り続ける母でありたいと思います。

令和三年八月三十日

佳作

寺小屋開設

長崎県佐々町 真辺 喜美子
まなべ きみこ

私は、高卒で何の資格も持たない、五十前のおばさんである。しかし、今の私の目標は、寺小屋を開くことだ。

こんな話をしたら、教員免許も何の肩書もないのにどうやって？と笑われるだろう。だが、五年ほど前からずっと心の奥でメラメラと野望を燃やしているのだ。

きっかけは、十年ほど前、中学校の特別支援学級支援員という仕事についたことだ。仕事の内容は、特別支援学級に籍を置く生徒と一緒に普通学級で授業を受け、時折手助けすることだった。当初は特別支援学級の子供たちだけをサポートしていたが、毎日授業を受けるなかで、勉強につまずき困っているが、なかなかそれを言い出せずにいる生徒が他にもたくさんいることを知った。

ある生徒はとても軽快に話をして場を盛り上げる頭の回転が速い子だったが、勉強となると途端に嫌な顔になり、悪態について注意され、どんどん勉強から離れていってしまった。またある生徒は、一生懸命ノートを取り提出物はキチンと出す真面目な子だったが、ノートを取ることばかりに気を取られ授業を聞くことが二の次になり、成績が極端に悪いという状況だった。

そういった生徒たちは、自分が勉強が苦手な事を知られるのを極端に嫌がるので、徐々に仲良くなり、ある時いつから数学が嫌いなのか尋ねると、引き算の繰り下がりや分数あたりからつまづいていた。そして、算数が苦手なまま中学生になってしまい、中学校の数学はなおさら分からず、ただ授業を受け流しているようだった。

この様に、ちょっとした事でつまづき、今更誰にも言えずにいる生徒がたくさんいる事を知った私は、他の支援員の方と昼休みに数学教室を開くことにした。勧誘のためのポスターを廊下に貼ったり、困っている様に見える生徒に算数教室に来るよう声をかけるが、誰も来ない日々が続いた。それでも、しつこく誘う私たちに同情したのか一部の生徒が顔を出してくれるようになった。昼休みの短い時間ではあったが、授業ではできない小学生の算数など根本的な所をやり直すことから始めた。引き算の繰り下がりや、まず足して十になる数をペアにして覚えてもらうことから始めたり、分数もピザを何等分にするかなど、イメージしやすいように教えるようにしていた。生徒たちの「わかった!」「そうだったのか!」と納得してパツと顔が明るくなる瞬間は、私にとっては何よりのご褒美だった。も

ちろん、一度解けただけで終わりではなく、また同じ様な問題を間違うのだが、その時は、焦らず怒らず、「前は解けていたよ、自信もって。」と声をかけ気長に付き合うことを心掛けていた。そして徐々に参加者が増え、半年が過ぎた頃には、私たち二人では手が回らないくらいの人数になっていった。

その生徒たちも中学を卒業し、私も今は違う仕事をしているが、あの時の充実感は忘れることができない。そして未だに、もっと分かりやすい教え方はなかったか、もっとしてあげられた事はなかったかと思う事がある。ただのおばさんがこんな事を語ると偉そうに思われるが、そうではない。学校の先生は、たくさん生徒を見ながら授業を進めて行かなければならないので、どうしても手の届かない部分が出てくるのは当たり前のことだ。だからこそ、その生徒たちの行き場として、なんでも聞ける近所のおばさんが教える寺小屋を開きたいと考えている。

寺小屋では数学だけでなく、時には作文を書いたり、夏休みの宿題の習字や自由研究を試みたり、子供たちが集まって自主的に何か動きだす手助けができる場所を作りたいと思っている。そして、勉強が「大嫌い」から「嫌い」に、「嫌い」から「普通」になったら寺小屋を卒業して次のステップに行くのもよし、そんな子供たちの気軽に来やすい場所になると最高だと思う。

そのために、今私がやらないといけないことは何か考えている。当時、子供たちに教えるために数検三級を取ったり、漢字検定準二級を取ったりした。そうすることで、自分が忘れていた記憶をた

き起こして、子供たちの目線で数学の分かりづらい点を考える事が出来た。しかし、英語が苦手な私は当時も今も英語から逃げ回っている。寺小屋を開設しても英語の質問には答えられないかもしれないと不安に感じている。だから、今私がやらなければならない事は中学英語を一から学ぶことだ。そして、私自身が中学英語を「嫌い」から「普通」になった時、ようやく寺小屋開設のスタート地点に立てると思っている。

歳はどんどん重なっていき、記憶力は低下している。急がないととあせりながら、ワクワクという燃料で私の野望は今も燃え続けている。

佳作

遅咲きの志

福岡県福岡市 山本 築^{やまもと きた}

一回りほど年齢離れた同級生たちと机を並べて一年と半年が経とうとしている。入学して間もなく蔓延したコロナウイルスの影響でしばらくはリモート学習が続いたが、ようやく対面での授業が再開され、およそ十数年ぶりに大学の教室で講義を受けている。若さの象徴のような同級生たちと一緒にノートを取り、課題や期末試験に追われる生活は懐かしさよりも新鮮さのほうが強く、また、目標に向かって一歩ずつ進んでいるという身の引き締まるような充実感

に満ちていた。

三十代半ばで医学の道を志したとき、周囲の反応はそれほど好意的とは言い難かった。新卒で働きはじめた会社ですでに後輩を指導する立場となり、結婚五年目の妻とのあいだには三歳の子どもがいた。これからの将来設計を踏まえると、ここでの方向転換はやはり無謀なものに違いなく、収入源がなくなることやこれから必要になる子どもの教育費など、その志を曲げるための理由は多くあった。それでも、一年前に他界した父の末期治療に携わってくれた医療従事者への尊敬は、まもなく就きたい職業となり、それが自分の努力によって叶う可能性があるのなら挑戦してみたいという決心を変え、それはできなかった。もう一度大学に入り直すと決めたときから学費とその期間に耐えるだけの生活費を貯めはじめ、三年後、子どもが小学校に上がるのを待って医学部のある大学を受験した。

もちろん、その志を通すことができたのは環境に恵まれた部分も大きかった。最初は難色を示していた妻もついに説得に応じ、入学試験に合格してからは代わりにフルタイムで働いて家計を支えてくれた。退職間際まで勉強の時間が取れるように協力してくれた同僚や、参考書の選び方などのアドバイスをくれた医療従事者の友人のおかげで万全の状態での試験に臨むことができた。また、期日までに目標の金額に届かなかった諸々の費用を補ってくれたのは奨学金と卒業後五年以内の返済が条件の義父の援助だった。その一つひとつに支えられた上で成り立っている学生生活を無碍にすることはできず、その期待に応じることが恩返しのはじまりだと心に留めて日々

を過ごした。

医学部生の一日は一限から五限まで講義がつまっていて、その上、少しでも金銭面の負担を減らすために空いた時間にはアルバイトを入れていたのも、子どもとの会話もままならないほど忙しく過ぎていった。骨の名前や筋肉と神経の働きなど暗記しなければならぬものも多く、社会人の頃とは使う脳の部分が違うために定期試験の前日は徹夜で机に張り付いていなければならないこともあった。それでもそのような生活を続けることは苦にならなかった。もちろんそれは一世一代の選択に背水の陣で臨んでいるという緊張感のおかげだったが、それ以上に、自らそれを選んで動いたという前向きな姿勢のためでもあった。能動的な行為がもたらす効果にあらためて気づけたことは、この学生生活のなかでも大きな収穫の一つだった。

何かを志すのに年齢は関係ない、という言葉は正しいと思う。ただ、年齢が上がるにつれてその障害となるものが増えることも事実だろう。私の場合、金銭面の不安と卒業後の進路についての不安はつねに付きまとっている。自分の選択が家族を路頭に迷わせることになるってはいけないのだ。そのため、必ずしも志を通すべきだと思っているわけではない。あるいは志を曲げる決断が称賛される場合もあるだろう。

その上で、自分が医師の道を志したことについては良かったと思っている。自分のなかの情熱をもう一度取り戻すことができ、また、そんな自分を支えてくれる人たちの存在にあらためて気づくことができた。その恩に報いるように医療従事者として人の役に立ち

たいと、命を守りたいと、このような時代だからこそ切に願っている。また、これはいくらか贅沢な望みだが、この遅咲きの志が同世代の、あるいは、同級生たちの一つの指針になればそれ以上の喜びはない。

先日、夏季休業中に与えられた課題に取り組んでいると、となりでノートを広げていた同じく夏休み中の息子が「お父さんも宿題？」と顔にいたずらそうな笑みを浮かべながら尋ねてきた。私が頷く代わりにその脇腹をくすぐると、しばらく涙を流しながら笑い転げたあとでおもむろにこう言った。

「ぼくと一緒だね」

生きるということは学び続けることかもしれない。これからも志を持ってこの自分の選んだ人生に取り組んでいきたい。



下田歌子賞について

下田歌子賞は、平成十六（二〇〇四）年に下田歌子先生生誕百五十年を迎えるにあたり、下田歌子先生のふるさとである旧岩村町（現、岐阜県恵那市岩村町）が岐阜県、実践女子学園、P H P 研究所の協力を得て、下田歌子先生の業績を顕彰しつつ、エッセイ募集を通して、これからの生き方、考え方、教育のあり方を、共に考え学ぶために設けた公募賞です。平成十五年度の第一回募集以降、毎年全国各地から多数の秀作が寄せられています。

審査経過報告

本年度の下田歌子賞は、「志—今、伝えたいこと」をテーマにしました。「志」というテーマは、下田歌子先生が、故郷・岩村を後に東京へと旅立つ時に詠んだ「綾錦の歌」にのっとったもので、平成二十九（二〇一七）年度の第十五回以降本年度で連続五回目となります。六月から九月までの四か月間の募集期間で、エッセイの部は、小学生の部一〇九作品、中学生の部一〇三二作品、一般の部二二四作品が全国より寄せられ、恵那市先人顕彰事業「下田歌子賞」実行委員会による事前審査の後、作家の童門冬二氏を審査委員長に、吉田公平東洋大学名誉教授、本年度から審査委員に加わっていただいた、女

優で元宝塚歌劇団の初風緑氏、難波雅紀実践女子大学・実践女子大学短期大学部学長、寺田昭一P H P 研究所シニアコンサルタント、小坂喬峰恵那市長の六名の審査委員による最終審査の結果、各部、最優秀賞一作品、優秀賞三作品、佳作五作品の九作品を受賞作品に決定しました。

短歌の部は、小学生の部二七三首、中学生の部一四四九首、一般の部二九三首が寄せられ、恵那市先人顕彰事業「下田歌子賞」実行委員会の事前審査により各部十首を候補として絞り込んだ後、恵那市民及び来訪者による投票により各部門五首を入選作品として選びました。

学校賞の授与について

平成三十（二〇一八）年度の第十六回下田歌子賞より、「学校賞」を授与しています。この賞は、「エッセイの部」「短歌の部」いずれか、または両方に学校で取り組まれ、顕著に応募数の多かった学校に授与させていただく賞で、本年度は、「エッセイの部」七校、「短歌の部」十四校、「エッセイの部」「短歌の部」両方一校、計二十二校に記念品として盾を贈呈しました。

表彰式と記念イベントについて

下田歌子賞の表彰式と記念イベントは、平成十五（二〇〇三）年度の第一回以来、下田歌子先生のおふるさと岐阜県恵那市岩村町の岩村コミュニティセンターで開催してきましたが、第十八回の昨年度（令和二年度）は、新型コロナウイルス感染症拡大に対応して、三密が回避でき、インターネットによるオンライン中継環境も整った恵那文化センター大ホールに会場を変更。会場参加は受賞者・関係者に限定するとともに、会場に参加できない受賞者・関係者をオンラインで結んで開催しました。本年度も、恵那文化センターで開催。新型コロナウイルス感染症拡大に配慮しながらの会場開催に加えて、オンライン、YouTubeでの中継も行ないました。

岐阜県恵那市と実践女子学園の連携協定

下田歌子先生を学祖とする実践女子学園と生誕地恵那市は、先人顕彰事業「下田歌子賞」をはじめとして、中学生の修学旅行や、大学・短期大学の夏季セミナーなど活発な交流が進められてきましたが、さらなる相互の学術・文化の向上と地域の振興に寄与することを目的として、平成二十二（二〇一〇）年十一月二十七日（土）、第八回下田歌子賞表彰式・記念イベントに合わせて、実践女子学園と恵那市の連携協定が締結されました。また、令和元（二〇一九）年は、恵那市市制十五周年を迎えるとともに、実践女子学園創立百二十周年という記念すべき年を迎え、五月七日に恵那市岩村町の下田歌子先生生誕の地で実践女子学園百二十周年記念式典が開催されました。歌子賞（第十七回）も、恵那市市制十五周年・実践女子学園創立百二十周年記念事業として開催されました。

【各回の募集テーマ】

回	年度	エッセイの部	短歌の部
第1回	平成15年度	「男らしさ、女らしさ」	……
第2回	16年度	「出会い」	……
第3回	17年度	「家族みんなで考えよう 〜我が家の約束ごと」	……
第4回	18年度	「父・母・祖父母の教え」	……
第5回	19年度	「父・母・祖父母・兄弟・子どもたち 〜忘れられないあの一言」	……
第6回	20年度	「家族への思い」	……
第7回	21年度	「先人に学ぶ」	……
第8回	22年度	「先人に学ぶ」	「家族・思いやりの歌」
第9回	23年度	「先人に学ぶ」	「絆」
第10回	24年度	「母」	「母」
第11回	25年度	「ふるさと」	「ふるさと」
第12回	26年度	「ふるさと」	「ふるさと」
第13回	27年度	「家族」	「家族」
第14回	28年度	「家族」	「家族」
第15回	29年度	「志（夢・願い）」	「志（夢・願い）」
第16回	30年度	「志（夢・願い）」	「志（夢・願い）」
第17回	令和元年度	「志」	「志」
第18回	2年度	「志」	「志」
第19回	3年度	「志（今、伝えたいこと）」	「志（今、伝えたいこと）」

※「短歌の部」は第8回から募集

※第3回は、エッセイではなく、標語募集

※第4回、第5回、第6回は、恵那市合併を記念して、エッセイの部とは別に「写真の部 ふるさと再発見！あなたが選ぶ恵那市の新名所」も募集。

